

●#1 『ペロー童話集』

* ルイ 14 世の時代。ペローはいくつかのフランス王立アカデミー【[申し送り：フランス王立アカデミー](#)】の下に、アカデミーがいくつもあります。現在のフランス学士院とのことです。<https://ja.wikipedia.org/wiki/フランス学士院>】の創設にあたり、中心的人物として活躍した。

* ヴェルサイユ宮殿庭園の迷路にしつらえたその噴水はどれも、イソップの寓話に登場するキャラクターにちなんでおり、吹きだす水で登場する人間や動物が話をする様子を表現したという徹底ぶり【[申し送り：画像検索すると、キャラクターの口から水が吹き出しています](#)】。そのうえ 1677 年には、この迷路のガイドブックまで書いている。

* 「眠れる森の美女」で女の子は好奇心に負けた罰として、眠らされてしまう。めでたく結婚しても、王子の母親は子どもを食べる人食いだ【[申し送り：ペロー版では、王子との結婚後がこう描かれているそうです。日本語タイトルを『いばら姫』とする資料もありました](#)】。少女は「赤ずきん」のように、危害を加えようとする男に【[申し送り：predatory men](#)】でした。[ジェンダーから分析する視点を活かしました](#)】おそわれやすい。ところが少年は、「長ぐつをはいた猫」のように、英雄的戦士になれと励まされる。「青ひげ」はめとった妻を次々に殺すが、話の最後で結婚した妻だけは殺しそびれる。

* その意味で、ペローが貢献した書物は 2 冊ある。『La Peinture 絵画』は、ルイ 14 世が最も気に入っていた【[申し送り：「第一画家」だったそうです](#)】お抱えの画家シャルル・ルブランに捧げられている。また、1670 年に発表した著作は王の愛人に捧げられている。

●#2 『グリム童話集』

* 「グリム兄弟」として知られるヤーコブとヴィルヘルムの少年時代は、苦勞の連続だった。ふたりはそろってドイツ中央部にある大学都市【[申し送り：「大学」は原文にはなく、情報を補っております](#)】カッセルに住み、法律を勉強し【[申し送り：大学都市カッセルはグリム兄弟が 30 年暮らした場所として有名](#)】、司法官だった父親のように法律家を目

指した。しかし、幼い頃に父親と祖父、母親を次々に亡くしていた【申し送り：父親はヤーコブ 11歳のときに亡くなる】ため、長男と次男であるヤーコブとヴィルヘルムは、大勢いた【申し送り：無事に成人したきょうだいは6人】弟や妹を養わなければならなかった。

* 祖国ドイツでは、グリム兄弟といえば民話の収集家としての功績だけではなく、歴史に残る大辞典『Deutsches Wörterbuch グリム・ドイツ語辞典』を手がけたことでも知られている。とはいえ、ふたりがたずさわったのはFの項目にある「frucht (フルーツ)」という単語までで、そこから先の作業は後世の学者に引き継がれ、約100年後【申し送り：原文にない語「約100年後」と補足しています。着手は1838年とのことです】1961年によく完成する。

* ウォルト・ディズニーがグリム兄弟の物語に興味を持ったのはそもそも、絵と文章を一体化させる昔ながらのやり方に注目したことが始まりだ。ディズニー初の長編映画であり世界初の長編カラーアニメ映画【申し送り：「世界初...アニメ映画である」、は、原文にない情報を補足しました】『白雪姫』（1937年）は、グリム兄弟の物語をもとにしている。

●#3 『アンデルセン童話』

* ハンス・クリスチャン・アンデルセン

Hans Christian Andersen (1805 - 1875)

【申し送り：デンマーク大使館にメールで問い合わせたところ、「ハンス・クレスチャン・アナスン」がデンマーク語の発音に近いとのことですが、「アナスン」ではだれのことだかわかりませんので、英語の発音表記のままにしてあります。本文に出てくる人名は、英語ではなく原語の発音の表記にしてあります】

* デンマークの童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセン（デンマーク語ではハンス・クレスチャン・アナスン）【申し送り：デンマーク語の表記は、金原先生のご指示で入れています】は、初めのうちは、民話を単に脚色するだけだったが、後に、創作童話をつくり始めた。そういった自作の物語は、アンデルセンが語り継いだ物語と同じように、いまでも世代を超えて世界中で親しまれている。

* 汎スカンディナヴィア主義【(訳注/19世紀中頃からスウェーデン王室を中心にデンマーク、ノルウェーに起こった「三国統合」を主張する運動)】の信奉者であった彼の作詞した国家が、人気を集めたこともあった。【申し送り：原文は pan-Scandinavian。ブリタニカ国際大百科事典や wiki に載っていたことを補足しながら訳しました】

* 1833年、国王からの外遊資金などを得て【申し送り：原文は with the backing of some supportive benefactors 『アンデルセン夢をさがしあてた詩人』(偕成社)の年表を参照してこのような訳にしました】、アンデルセンはヨーロッパ旅行に出発し、各地を旅しながら民話を収集したり、短編小説を書いたりした。ローマ滞在中に、自身の体験に基づく、半自伝的小説『即興詩人』(1835年)を書き始める。この作品が反響を呼び、1836年、1837年【申し送り：原文は consecutive years。『アンデルセン夢をさがしあてた詩人』(偕成社)の年表で確認しました】にさらに2作の小説を発表して、執筆に専念するようになった。

* 多くの女性に夢中になったが、生涯、結婚することはなかった。好意を抱いた女性の中には、スウェーデン人オペラ歌手のイェンニー・リンド【申し送り：原文は Jenny Lind。スウェーデン大使館にメールで問い合わせたところ、「イェンニー・リンドという表記が一番オリジナルに近い」という回答でした。『アンデルセン夢をさがしあてた詩人』(偕成社)では、「ジェニー・リンド」となっていますが、こちらは英語の発音表記だと思います】があり、アンデルセンはリンドにプロポーズし、またリンドに触発されて『ナイチンゲール』を書いた。この作品の出版のあと、リンドは「スウェーデンのナイチンゲール」と呼ばれるようになったといわれている。友人たちの証言によると、臨終のとき、アンデルセンの胸の上に、若かりし頃の片思いの相手リーボル・ボイト【申し送り：原文は childhood sweetheart, Riborg Voigt。『アンデルセン 夢をさがしあてた詩人』(偕成社)によると、アンデルセンが Riborg と出会ったのは1830年アンデルセンが25歳のときですので、childhood とありますが、若かりし頃としました(リーボルには、このときすでに婚約者がいました)。「リーボル・ボイト」という表記は、同書の表記と、デンマーク大使館の回答に従いました(ただし、デンマーク大使館の方の回答によると、リーボルのルとボイトのトはかなり小さめに発音するのでほとんどきこえない、とのことで

す)】からの手紙が握られていたという。

* ハンス・クリスチャン・アンデルセンのおもな作品：『裸の王さま』、『エンドウマメの上にお姫さま』、『親指姫』、『人魚姫』、『がまんづよいスズの兵隊』、『野の白鳥』、『ナイチンゲール』、『みにくいアヒルの子』、『雪の女王』、『マッチ売りの少女』【申し送り：『裸の王さま』以外『アンデルセン童話全集』（西村書店）の表記に従っています。西村書店では『裸の王さま』は『皇帝の新しい服』（英語は The Emperor' s New Clothes）となっており、『裸の王さま』のほうが認知度が高いと思い、こちらの表記にしました】

* アンデルセンと同時代のデンマーク人ハンス・タイナー【申し送り：原文は Hans Tegner。デンマーク大使館にメールで問い合わせたところ、Tegner の発音は「当館デンマーク人職員の発音では「タイナー」ときこえました」とのご回答でした】が挿画を手がけたアンデルセン童話集の国際版（1900 年）

* アンデルセンと同時代のデンマーク人ハンス・タイナー【申し送り：原文は Hans Tegner。デンマーク大使館にメールで問い合わせたところ、Tegner の発音は「当館デンマーク人職員の発音では「タイナー」ときこえました」とのご回答でした】が挿画を手がけたアンデルセン童話集の国際版（1900 年）

* フランス人のエドモン・デュラックの挿画による本（1911 年）【申し送り：Frenchman Edmund Dulac とあり、英語読みだと辞書や wiki では「エドマンド」になっています】

●#4 『エドワード・リアのナンセンス詩集成』

* 『エドワード・リアのナンセンス詩集成』

The Complete Nonsense of Edward Lear (1846)

【申し送り：こちらのタイトルとして表記されている The Complete Nonsense of Edward Lear は、A Book of Nonsense (1846 年)、Nonsense Songs, Stories, Botany and Alphabets (1871 年)、More Nonsense Songs, Pictures, etc. (1872 年)、Laughable Lyrics (1877 年) と Nonsense Songs and Stories (1895 年) を合わせた作品集

(Helbrook Jackson 編、Faber and Faber、1947年)のタイトルようです。日本ではこのなかで、A Book of Nonsense (1846年)が『ナンセンスの絵本』(高橋康也訳、河出書房新社、1976年)と『ナンセンスの絵本』(柳瀬尚紀訳、ちくま文庫、1988年)として出版されています。『ナンセンスの絵本：完訳』(柳瀬尚紀訳、岩波書店、2003年)として出版されているものもありますが、The Complete Nonsense of Edward Lear とは収録作品が異なるようなので、上記は訳者が考えたタイトルです(記載の1846年は『ナンセンスの絵本』の出版年)。

* 『The Complete Nonsense of Edward Lear エドワード・リアのナンセンス詩集成』は、リアの存命中に出版された『ナンセンスの絵本』(1846年)と『Nonsense Songs, Stories, Botany and Alphabets ナンセンスの歌・物語・植物学・アルファベット』(1871年)などを収録した作品集だ。【申し送り：原文ではこの2冊の作品集と書いてありますが、目次をみるとほかにも3冊収められているようなのでこのように訳しています。】前者にはリアの有名なリメリック(5行戯詩)が集められ、後者にはリアの作品の中で最もよく知られている「The Owl and the Pussycat フクロウくんとネコちゃん」の詩が収められている。【申し送り：日本でこの詩の邦訳が絵本として2冊出ているようですが、いずれも絶版のようです。『リアさんって人、とっても愉快!』(柳瀬尚紀訳、西村書店、2012年)に収められている邦訳のタイトルは、「ふくろう君とにゃんこ嬢】

* リアはナンセンスな詩を実際に使われている言葉で書くだけでは満足せず、新しい言葉を造り出してしまうことがよくあった。「The Owl and the Pussycat フクロウくんとネコちゃん」には、おそらくリアの造語で一番よく知られている「the runcible spoon (先割れスプーン)」が出てくる。この造語「ランシブル(runcible)」は、なんともぴったりの形容詞で、どうしてもっと早く考えつかなかったのだろうかと思わせるほどだ。【申し送り：“runcible”の語源には諸説あるそうですが、柳瀬尚紀氏の説としては“runcinate”(タンポポの葉のように葉先と逆向きにギザギザがある)という植物学用語に、形容詞を作る“ble”を語尾としてくっつけた造語ではないかとのことです。(『リアさんって人、とっても愉快!』(柳瀬尚紀訳、西村書店、2012年) 訳者あとがきより)】この言葉は現在では、いくつかの著名な辞書にも掲載されている。残念なことに、今ではリアが意図していたよりもきっちりと定義されてしまっている。『the Penguin English Dictionary ペンギ

ン英語辞典』では、「湾曲した三又の先端をもつ、先の尖ったフォーク」と説明されている。これではもはや、ナンセンスとはいえない。一方で現在、リアのリメリックに影響を受けて始まったプロジェクトがある。これは、『OEDILF』というだれでも編集可能なオンライン辞書で、『オックスフォード英語辞典』に載っているすべての単語をリメリックで定義しなおそう (the Oxford English Dictionary In Limerick Form)」とする一大プロジェクトだ。これはまちががなく、ナンセンスといえるだろう。【申し送り：2004年にサイトが立ち上がった時点では上記の名前でしたが、現在は“The Omnificent English Dictionary In Limerick Form”に変更されています。ちなみに、サイトのトップページには、プロジェクトの推定達成日が計算されて記載されており、2020年9月6日現在の推定日は2063年11月3日とされています。】

●#5 『ふしぎの国のアリスの冒険』

* ナンセンスはそもそも、条理と不条理をおりませ、筋の通った考えをひっくり返す昔の詩や童謡の伝統を受け継いだジャンルだ。【申し送り：「昔の詩や童謡の」、は原文にない語を補いました】

●#7 『すてきなケティ』と〈ケティ〉シリーズ

* 『すてきなケティ』と〈ケティ〉シリーズ

【申し送り：『ケティ物語』という表記が多いのですが、いくつかある訳書の中で、おそらくいちばん新しく入手しやすいのは『すてきなケティ』（山主敏子訳、ポプラ社、1986年）で、続編も同じ訳者と出版社から数冊出ていますので、この表記にしました】

* そしてオルコットはクーリッジの初めての小説でもある短編小説集『The New Year's Bargain 新年の取り引き』（1871年）【申し送り：原文 p 26 では 1971 となっているのですが、ネットで確認したところ、first published は 1871 となっていますので修正しました】

●#8 『トム・ソーヤーの冒険』

* アメリカン・パブリッシング・カンパニーから出版された『トム・ソーヤーの冒険』の初版。【申し送り：『トム・ソーヤーの冒険』の完成原稿は現在 2 種類あり、ひとつはトウエイン自筆の原稿でアメリカ版の初版本（American Publishing Company）の印刷原稿となったもの。もうひとつは、トウエインの自筆原稿をふたりの秘書が清書したもので、イギリスの初版本（Chatto and Windus）の印刷原稿となったもの。】

* そんな旅のひとつで、トウエインはチャーリー・ラングドンという男に出会い、その姉である【申し送り：複数サイト、書籍で姉と確認しました】オリヴィアを紹介された。トウエインはオリヴィアと 1870 年に結婚。

* トウエインは後にふたたびトム・ソーヤーを主人公にした続編『Tom Sawyer Abroad トム・ソーヤーの外国旅行』（1894 年）と『トム・ソーヤーの探偵』（1896 年）を出版した。【申し送り：トム・ソーヤーの続編 2 作の邦訳は、1955 年に 2 作で 1 冊として出版されていました（『トム・ソーヤーの探偵・探検（新潮文庫）』大久保康雄訳、新潮社、1955 年）。ほかに、Tom Sawyer: Detective のほうは『トム・ソーヤーの探偵』（齊藤健一訳、講談社、1995 年）として図書館で入手できそうだったのですが、Tom Sawyer Abroad の邦訳は数冊あるものの入手困難と思われたため、上記のような表記にしています。】

●#11 『宝島』

* そして今でも、幅広い年齢層の子どもたちが、ステイーヴンソンの描いた宝の地図に胸を躍らせている。地図の宝のありかにつけられたバツ印が定番になったのは、ほかでもないステイーヴンソンの影響だ。【申し送り：原文には the map which Stevenson himself drew, and on which he was the first to use the phrase, “X Marks The Spot”.とありますが、本人がかいた宝の地図にはバツ印の横に“Bulk of treasure here”と書かれていて、“X Marks the Spot”と書かれていませんでした。また、英語の文献で「宝の地図のバツ印はたしかに有名にしたけれど、ステイーヴンソンが最初に使い出したといわれる“X Marks the Spot”というフレーズは、実際には宝島では使われていない」という旨を書いている本も見つけました（参考：<https://bit.ly/3i5XMfZ>）】

●#16 『たのしい川べ』

* 『たのしい川べ』【申し送り：石井桃子訳は『たのしい川べ』（2003年）、杉田七重訳は『楽しい川辺』（2017年）でした】

* 『Dream Days 夢みる日々』がよく知られているのは、グレアムのなかで最も有名な短い物語『のんきなりゅう』が収録されているからだ。【申し送り：中川千尋訳（2006年）のタイトルをしましたが、石井桃子訳では『おひとよしのりゅう』（1966年）でした】この話は、思いやりのある視点で描かれ、悪者として描かれてきたりゅうのイメージを覆している。

●#17 『ピーター・パンとウェンディ』

* ここに登場するピーター・パンは生後7日の赤ん坊で、自分が鳥だった頃のことを思い出して家の窓から飛び立つ。【申し送り：原文は Peter Pan was a baby who fled from home after being taught to fly by fairies. after being taught to fly by fairies とありますが、『小さな白い鳥』（鈴木重敏訳、パロル舎）と『ケンジントン公園のピーター・パン』（南條竹則訳、光文社古典新訳文庫）を読んで確認したところ、原文とは内容がちがっていましたので、訳書のほうに合わせました（ネットなどで確認したあらすじでも、訳書のほうの内容と一致しています）。物語の中盤で、お母さんのところに帰ろうとしたピーターが、妖精に飛ぶ力を与えてもらう場面はありますが、妖精に飛び方を教えてもらう場面はありません。物語の中では、生まれる前はみんな鳥だった、という設定になっています】

* これだけでは満足せず、バリーはさらに舞台劇『ピーター・パン、あるいは大人になろうとしない少年』【申し送り：原文は Peter Pan, or, The Boy Who Wouldn't Grow Up. 『ケンジントン公園のピーター・パン』（光文社古典新訳文庫）で訳者の南條竹則さんが解説でこのように訳してあり、それを使いました。石井桃子さんは『ピーター・パンとウェンディ』（福音館書店）の解説で「ピーター・パン——おとなにならない少年」という訳です】で、ピーター・パンを描いた。

* 現代のわたしたちにもなじみのある劇のストーリーに肉付けして、バリーは小説版の『ピーターとウェンディ』を書きあげた（1911年初版）。脚本のほうは何度も手直しを重ね、1928年に5幕の決定版を発表した。【申し送り：原文は **The playscript was finally published in 1928. finally** とはどういう意味か考えたのですが、『ケンジントン公園のピーター・パン』（南條竹則訳、光文社古典新訳文庫）の解説を参考にして、このように補足して訳しました】ピーターが主人公というのは最初からずっと変わらないが、この小説と脚本では新たに、ウェンディ・ダーリング、ウェンディの弟のジョンとマイケル、ネバーランドの【迷い子たち／ロストボーイズ】、【申し送り：原文は **Lost Boys**。石井桃子さんが「迷い子たち」という訳語を使っていますので、それをそのまま使わせていただきましたが、ロストボーイズという言い方も知られていると思いますので、ルビをふりました】ピーターの守護妖精ティンカー・ベル、最大の敵である海賊のフック船長が登場する。

* 1896年、バリーは母の伝記『**Margaret Ogilvy: Life is a Long Lesson in Humility** マーガレット・オグルヴィー——人生とは謙虚さを学ぶための長い授業』を発表した。【申し送り：「オグルヴィー」という表記は『ケンジントン公園〜』の訳者の南條竹則さんの解説の訳をそのまま使いました。『ピーター・パン〜』の石井桃子さんの解説では「オッギルヴィ」となっています】

●#18 『秘密の花園』

* バラは、愛情をもって一生懸命世話をすればよみがえり、また花を咲かせられる。メアリーやコリンも同じだ。そして、植物だけではなく、ふたりの主人公にも手を差し伸べたのは使用人の弟【申し送り：原文 **son of a maid**、とあるのですが、正しくは、元使用人の息子、あるいは使用人の弟です。邦訳書、複数サイトで確認しております】、ディコンだ。この野生児ディコンが、この物語で大切な役割を果たす。

* バーネットも同じように、幸と不幸をひとしきり味わった。生まれ故郷であるイギリスのマンチェスターでは、銀や鉄製の高級装飾器具を扱っていた父親の商売【申し送り：原文、**hardware store** でした。この訳は Kindle 版『秘密の花園』羽田志津子訳、KADOKAWA 刊で確認しました】は成功していた。ところが一家はふたつの災難にみまわ

れる。

* バーネット一家はおじの招きでアメリカのテネシー州に移り住む。その土地で、おじが営む食料品店【申し送り：原文、dry goods business ですが、Frances Hodgson Burnett:Beyond the Secret Garden という本のなかに、”grocery store” という記述を確認しております】は繁昌していた。ところが戦争の特需で潤っていたおじの事業も、戦争が終わると縮小し、バーネットの家族を助けられなくなった。

* 1879年に知人の紹介でルイーザ・メイ・オルコットに出会ってからは、子ども向けの本も書くようになった。1881年には、一般向けの戯曲『Esmeralda エスメラルダ』【申し送り：原題は『Esmeralda』、邦題は『優しき乙女』というバーネット原作の映画が1915年に作られている】を発表。この作品は19世紀におけるブロードウェイ最長公演を記録した。

●#19 『ジャスト・ウィリアム』

* 『ジャスト・ウィリアム』

【申し送り：シリーズものですが、邦訳は短編が4話おさめられている『うわさのウィリアム——先生に夢中』若林三江子訳、ポプラ社、1987年のみのようです】

●#21 『クマのプーさん』

* A・A・ミルンの挿画家、E・H・シェパードは、その生涯をクマのプーとともに過ごした。ミルンとの最初の共同作品は『クリストファー・ロビンのうた』（1924年）で、プーと関わった最後の作品はヴァージニア・H・エリソン作『The Pooh Party Book プーのパーティしよう』（1971年）。こちらはシェパードが92歳のときだ。【申し送り：The Pooh Party Bookの著者は「ヴァージニア・H・エリソン（Virginia H. Ellison）」で、原文にはないのですがミルンの作品でないと区別するために入れました】

* 『クマのプーさん』 Winnie - the - Pooh (1926)

【申し送り：石井桃子訳（岩波少年文庫）の表記に従いました。『クマのプー』（森絵都

訳、角川文庫)が最新なので、初めはそちらの表記を使おうと思いましたが、プーの続編は石井桃子さんしか訳しておらず、Tiggerは続編からの登場ですので、石井訳にしました。登場する動物などの名前の訳語は、すべて石井訳をそのまま使いました】

* 百エーカーの森は、サセックス州アッシュダウンの森の一部である五百エーカーの森がモデルになっている。この森の近くにあった古民家を、ミルン一家は別荘としてたびたび使っていた。【申し送り：原文は *near the farm on which the Milnes lived* なのですが、訳書の解説やネットなどで確認したところ、住まいはチェルシーで、こちらの古民家と行き来していたようですので、このように補足して訳しました】プー、コブタ、トラー、イーヨー、カンガ、ルーは、ミルンの息子クリストファー・ロビン（物語ではプーの人間の友だちとして登場する）が実際に持っていたぬいぐるみがモデルになっている。ルー以外のぬいぐるみは現存しており、1987年に出版社からニューヨーク公共図書館に寄贈され、同図書館の児童室に今も展示されている。【申し送り：児童室の原文は *Children's Center*。『未来をつくる図書館 ニューヨークからの報告』（菅谷明子著、岩波新書、2003年）はニューヨーク公共図書館について詳しく書かれた本なのですが、この本によると、「クマのプーさん」のオリジナルのぬいぐるみは、ニューヨーク公共図書館の地域分館である「ドネル図書館」の児童室に展示してあるようです。Children Centerには、本書で使われていた「児童室」という訳語をあてました。ただ、ニューヨーク公共図書館は本館、分館合わせて10数館あり、ネットでは、「プーのぬいぐるみはニューヨーク公共図書館の本館のチルドレンルームにある」と書いてあるものもあり、2020年現在、どこに展示されているのか調べきれなかったので、「同図書館の児童室」と特定せずに訳しました】

* 『クマのプーさん』の中でもとくに印象に残るのは、ハチミツをとろうとしたプーが雨雲のふりをして奮闘する話、ハチミツを食べすぎたプーがウサギの家の入り口の穴にはまってしまう話、ゾゾ（ゾウ）をつかまえるためにプーがコブタといっしょに罾をしかける話、モモンガーを探すプーがコブタといっしょに自分たちの足跡を追う話だろう。小枝を川に投げて競う「プー棒投げ」【申し送り：原文は *Poohstiks*、石井訳です。「小枝を川に投げて競う」と補足しました】は、『プー横丁にたった家』でプーが発明した遊びで、現実の世界でも、いたるところで子どもたちがこの遊びをしている。

* モデルにしたのは、アッシュダウンの森と、クリストファー・ロビンのぬいぐるみだが、プーだけは、自分の息子の「グロウラー・ベア」をもとにした。【申し送り：原文は Growler（うなるもの）。ドイツのシュタイフ社の公式サイトには「体を寝かせたり起こしたりすると『グーグー』と鳴くタイプを『グロウラー』という」とあり、おそらくこのタイプのテディ・ベアだと思われます。訳注をつけようかと思ったのですが、この情報がこの文脈でそれほど重要ではないと思いやめました】

●#22 『エーミールと探偵たち』

* 『エーミールと探偵たち』 Emil and the Detectives 【申し送り：ドイツ語原題は『Emil und die Detektive』】（1928）

* その後の10年間、ケストナーは『The Missing Miniature 消えた細密画』【申し送り：ドイツ語原題は『Die verschwundene Miniatur』】（1935）のようなあたりさわりのない児童文学や『一杯の珈琲から』（1938）のような大人向けの軽いコメディーロマンス作品（その多くは中立国スイスで出版された）を書いた。後者はドイツに併合されたばかりのオーストリアのザルツブルクを舞台にしている。1945年にはソ連軍のベルリン侵攻から逃れるため、『The Wrong Face 偽りの顔』【申し送り：ドイツ語原題は『Das falsche Gesicht』】という架空の映画をでっち上げ、ロケに同行するため町を離れなくてはならないと当局に説明した。こうしてドイツの首都を制圧したソ連軍の残虐行為を免れることができた。

●#23 〈タンタンの冒険〉シリーズ

* タンタンが初めて登場したのは、ベルギーの日刊新聞「20世紀」紙の子ども向け木曜版付録「プチ20世紀」紙だった。そこで、漫画『タンタン ソビエトへ』の連載が開始した。【申し送り：日本公式サイトを参照し、原文にない情報を少々加えています。参照：http://www.tintin.co.jp/aboutth/aboutth_top.html】〈タンタンの冒険〉シリーズはこうして始まり、のちに23冊の物語がエルジェの生前に出版されることになる。【申し送り：エ

エルジェの死後、シリーズの 24 冊目として未完の物語のスケッチが出版されています。『タンタンとアルファアート』（仏 1986 年、日 2007 年）【[申し送り：タンタンの冒険](#)】デビュー後しばらくして、ベルギーのフランス語新聞「ル・ソワール」紙に移り、1946 年にこの主人公の名前をタイトルにした週刊誌「タンタン・マガジン」が創刊されてからは、そこで連載されるようになった。【[申し送り：「タンタンの冒険」](#)は、1929 年『プチ 20 世紀』紙で連載開始したが、ナチの侵略によりこの新聞社は撤収されて連載は中断。その後、占領軍に接収された『ル・ソワール』紙で連載を再開。終戦後、レジスタンスの英雄 R・ルブランが創刊した『タンタン・マガジン』誌で再スタートした。参照：

<https://twitter.com/FrancisHaddock/status/938659423035281409?s=20>】

* 初期の作品ではタンタンの新聞記者としての仕事ぶりがきっちりと描かれ、当時実際に新聞で報道されたソビエト連邦やコンゴ、アメリカの時事ニュースが扱われている。エルジェをシリーズ連載に抜擢したのは「20 世紀」紙【[申し送り：カトリック系右派の新聞](#)】の責任者で、この人物は非常に保守的なカトリックの神父だった。

* エルジェは物語の中で時事的な事件を取り上げるのをやめ、登場人物たちに重きを置いたストーリーを描くことに方向転換した。そうすることで、第二次世界大戦中もナチス占領下のベルギーで連載を続けようとしたのだ。【[申し送り：原文では World War I と記載されていますが、「ナチス占領下」と書いていることや連載の時期から考えて「第二次世界大戦」のことを指していると思います。](#)】

* 似た者同士の刑事コンビ、デュポンとデュボン【[申し送り：見た目はそっくりですが、血はつながっていないそうです。](#)】、いく先々でその土地の民族衣装を身にまとい、それでうまく変装した気になっている。4 作目の『ファラオの葉巻』（1934 年）でタンタンの逮捕令状をもって登場した際には、ふたりは変装なしの普段の格好で現れる。【[申し送り：この初登場シーンは、書籍で確認済みです。このふたりは 2 作目の『タンタンのコンゴ探検』にも少し登場しているようですが、もともとは違うキャラクターが同じセリフを話しているシーンだったのを、カラー版にする際に書き換えたようです。そのため、ここではあえてはっきりと「初めて」という言葉は使わないで訳しています。](#)】

* エルジェは実際に、チャン・チョンジェンという留学生と 1934 年に出会い、東洋の芸術や哲学について教わった。【申し送り：その後、チャン・チェンジェンは著名な彫刻家となり、ふたりはベルギーのテレビ局の取り計らいで 1981 年にベルギーで半世紀ぶりの再会を果たした。参照：<https://ovninavi.com/707livre/>】そこから受けた影響は作品と私生活の両方に現れるようになり、この時期の絵は日本の有名な浮世絵師、歌川広重と葛飾北斎を思い起こさせると指摘する批評家もいる。そしてさらに、エルジェはこの頃から自分のイラストのために、徹底的に絵の勉強をするようになった。『タンタン チベットをゆく』がエルジェのお気に入りなら、『青い蓮』はシリーズ最初の傑作といえる。【申し送り：『青い蓮』（1936 年）は 5 作目で、シリーズ最初の傑作だと一般的にいわれており、また転換点となった重要な作品だったようです（『タンタンの冒険：その夢と現実』マイクル・ファー、小野耕世訳、サンライズライセンシングカンパニー、2002 年、p51）。】

* 紙面で連載した漫画を本として出版する際、エルジェはその機会を利用してセリフを修正したり、さらにはその時代にそぐわないコマや差別的な内容を含むコマを描き直したりすることもよくあった。多くの批判を集めてきた『タンタンのコンゴ探検』では、特に当時のアフリカ植民地に対するベルギーの支配的な態度が表れる場面の修正が重ねられた。【申し送り：例として、タンタンが先生となり現地の子どもたちに「君たちの祖国、ベルギー」の講義をしている場面が、カラー版ではただ算数を教えている場面に修正されている。（ただし、タンタンが先生となっている部分にまだ支配関係の名残がある）】

* タンタンの物語の多くでは、その時代に合わせて実際に起こっている出来事や近未来の発展を描き、作品の中で宇宙旅行やカラーテレビの発明【申し送り：エルジェはカラーテレビの発展に詳しく、自分の漫画のなかに取り込もうと準備しており、現実より 5 年早く『カスタフィオーレ夫人の宝石』のなかでカラーテレビの登場を描いていたそうです】、政治的なプロパガンダ、アルコール中毒などを取り上げている。しかし、タンタン本人はシリーズを通してずっと変わることはない。エルジェが仕上げたシリーズ最後の作品『タンタンとピカロたち』（1976 年）だけ、タンタンはいつもと違う格好をしていて、ニッカポッカと呼ばれるゆったりとした半ズボンではなく、ぴっちりとした長ズボンをはいている。【申し送り：タンタンのトレードマークとして、「ニッカポッカ」という言葉が日本でよく使われているため、この言葉で訳しています。

http://www.tintin.co.jp/cast/tintin/cast_01.html】

●#24 『ツバメ号とアマゾン号』と〈ツバメ号とアマゾン号〉シリーズ

* ランサムは出版社からあてがわれたイラストレーター【申し送り：p.61にあるように表紙一面絵で埋め尽くされているなど、ご指定の「挿画」とするには絵の分量が多いようなので、本稿は「イラスト」・「イラストレーター」という語を採用いたしました】の作品にうんざりし、文章だけではなく絵も描くことにした。

* ランサムは筋金入りのヨットマンで、ヨットを次々に買い替えていた。そのうちの1艇には、『ツバメ号とアマゾン号』の登場人物の名前にちなんで「ナンシー・ブラケット」と名づけた。【申し送り：この船は現存し、The Nancy Blackett Trust が管理しているそうです】

* ランサムは児童書作家になる前、イギリスの「マンチェスター・ガーディアン」紙のロシア特派員として活躍し、ロシア革命を擁護する立場をとっていた【申し送り：『世界文学事典』集英社、2002年などには、「デイリー・ニューズ」紙特派員とありましたが、The Guardian 紙の公式サイトに".....was also a foreign correspondent for the Macchester Guardian"とあったその記述を信用することにしました】。レーニンやトロツキーとも親交があり、トロツキーの女性秘書イヴジニアと結婚にまで至るが、その裏ではイギリス政府に極秘情報を流していた。

●#25 『ぞうのババール』と〈ぞうのババール〉シリーズ

* 日本でもババールのグッズは販売されている。【申し送り：英語は There are Babar stores in Japan. ですが、ババールのみの商品を扱う店舗はみつからなかったので、このように訳しました。また、wiki では「ローラン」ですが、やがわすみこ訳に従い「ロラン」としました】

* 『ぞうのババール』と〈ぞうのババール〉シリーズ【申し送り：他の章では、動物の名前は基本カタカナで表記しましたが、この章はタイトルに合わせて、ひらがなで統一しました】

●#27 『風によつてきたメアリー・ポピンズ』と〈メアリー・ポピンズ〉シリーズ

* 〈メアリー・ポピンズ〉シリーズは全部で8冊。そのなかで、『台所のメアリー・ポピンズ おはなしとお料理ノート』（1975）には、料理のレシピもものっている。【申し送り：原文には *Mary Poppins in the Kitchen (1975) was the last and included recipes* とありますが、シリーズの最終巻は本文に著者自身も書いているように『メアリー・ポピンズとお隣さん』であるため、*the last* を省略して訳しています。邦題は小宮由・アンダーソン 夏代訳（アノニマ・スタジオ、2014年）から。】

* バンクス家と過ごす間、メアリー・ポピンズは魔法を使って子どもたちを楽しませ、厳しい規律を教えながら、みんなで次々と夢のような冒険に出かける。笑いじょうごのウィッグさんと宙に浮かびながら天井でお茶会をし、鳥のおばさんに会い、プレアディス星の7人姉妹の2番目、マイアといっしょにクリスマスの買い物をする【申し送り：原文にない情報を少々書き足しています。原作で確認済みです】。

* 原作の小説には、映画とは大きく異なる点がある。原作では、バンクス家の子どもたちは4人いて、さらにもうひとり増えて5人になる。【申し送り：原文にない情報を少々補っています。原作で確認済みです】

* 映画でディック・ヴァン・ダイクが演じた煙突掃除屋の役は、原作の登場人物の設定をいくつか組み合わせたキャラクターだ【申し送り：原作のパートはマッチ売りという設定】。

* 原作では、父親のバンクス氏は厳格で、子どもたちの気持ちに無関心な人物として描かれているものの、シリーズを通してストーリーにはほとんど登場しない。しかし、映画の中では次第に原作よりも柔らかい人物像になっていき、ほほえましいキャラクターとして

描かれる。バンクス氏は、銀行（{Bank／ルビ：バンク}）で働いており、この点はトラヴァースの実の父親と重なる。映画のバンクス氏は、子どもたちのせいで仕事を解雇されてしまうが、良い父親であることの大切さに気づき、自分自身が救われる。実際にトラヴァースの父親は銀行の支店長から降格させられており、それはアルコール依存症が原因だった。ディズニーは、P・L・トラヴァースが『風にのったメアリー・ポピンズ』のバンクス氏というキャラクターを通し、自分の父親を救おうとしたのだと考えた。その背景が映画『ウォルト・ディズニーの約束』（2013年）で語られている（原題は『Saving Mr. Banks バンクス氏の救済』）。【申し送り：映画の中で、トム・ハンクス演じるディズニーは、トラヴァースに対して、「メアリー・ポピンズは、子どもたちを救いにきたのではなく、あなたの父親を救いに来た。この物語はすべてあなたと父親の物語だ」と語る（『ウォルト・ディズニーの約束』）。トラヴァースの本名はヘレン・ゴフ。P.L.トラヴァースの名前は、父親のトラヴァース・ゴフから。その名をペンネームにするほど父親を敬愛していたトラヴァース。映画では、一緒に空想の世界で遊ぶ優しかった父親の姿と、一方で仕事に疲れアルコールに蝕まれていく父親の姿が、幼少期の回想として描かれる。】

【p.74】#31 『げんきなマドレーヌ』

* [上]『げんきなマドレーヌ』の初版は1939年。人気が出たのは戦後になってからだった。そこで、ルドウィッヒ・ベームルマンズは1953年から1961年の間に5冊の続編を出版し、その後を孫のジョン・ベームルマンズ・マルシアーノが引き継いだ。【申し送り：原文には、Bemelmans and (latterly) his grandson John Bemelmans Marciano wrote five sequels between 1953 and 1961.とありますが、ルドウィッヒ・ベームルマンズがかいたのがこのシリーズ最初の6冊で、それ以降の続編を孫のマルシアーノがかいているようです。】

* この物語の舞台はパリ。絵本では、ベームルマンズ自身が描いた軽やかで動きのあるスケッチに、短いけれど記憶に残るリズムカルで詩的な文章が添えられている。【申し送り：原文ではcouplets（二行連句）となっていますが、邦訳では二行連句になっていないため、「詩的な文章」としました】

* ベーメルマンズは、1914年にアメリカに渡ることになる。もとをただせばそれは、あまりにも問題の多い家庭環境に育ったことが原因だった。父親のランペルトは画家で、家庭を捨ててほかの女性と出ていった。そのとき、母親と当時ルドウィッヒ少年の家庭教師をしていた女性はどちらも、父ランペルトの子どもを身ごもったまま置き去りにされてしまった。【申し送り：父ランペルトは愛人エイミーと駆け落ち。ベーメルマンズの母と家庭教師のガゼルは、そのときどちらも身ごもっていた。人物関係が複雑だったため、本文では情報整理のために父親の名前を補いました。（この箇所の参考：『ベーメルマンズ マドレーヌの作者の絵と生涯』、福本友美子、BL出版、2011年）】

* ベーメルマンズの反抗的な態度は、一向に変わらなかった。オーストリアにあるおじの経営するホテルで働くことになるが、そこでも問題を起こしてばかりだった。そして、ついに更生施設に入るかアメリカに行くかの二択を迫られた。【申し送り：「アメリカ」と言葉補っています。上記の伝記でこの時の背景は確認済みです。】

* ニューヨークに来てからは、アメリカ陸軍に入隊した。【申し送り：1917年にアメリカ陸軍に志願して入隊し、第一次世界大戦中の2年間を過ごした。1918年には、米国市民権を取得し、陸軍を名誉除隊。】その後は、生活のためにいくつかのホテルでウェイター見習いを経験し、リッツカールトンホテルでも働いた。【申し送り：伝記によると、おじさんが書いてくれた3つの高級ホテルあての紹介状を頼りに、マカルピンホテルとアスターホテルにバスボーイ（ウェイター見習い）としてつとめ、その後リッツカールトンホテルにやとわれることになり、約15年間をそこで過ごした。（『ベーメルマンズ マドレーヌの作者の絵と生涯』、福本友美子、BL出版、2011、10）】やがて、雇われ仕事は向いていないと悟る。ベーメルマンズはホテルで働くのをやめ、父親と同じようなプロの画家になることを決心し、同時に作家も志すようになる。

●#32 『マイク・マリガンとスチーム・シヨベル』

* ヴァージニア・リー・バートン Virginia Lee Burton (1909 - 1968)

【申し送り：いしいももこ訳では「バージニア」でした。いまは Virginia はヴァージニアとすることが多いようなので、ヴァージニアを採用しました】

* ヴァージニア・リー・バートンは、サンフランシスコの美術学校で絵とバレエを学んだ。アラメダにある自宅から学校へフェリーで通う途中、ほかの乗客を描いて絵の練習をしていたという。【申し送り：バレエを習っていたことと、フェリーボートにのって学校に通っていたことは原文にはないですが、情報を補足して訳しています。①絵本の著者紹介を確認したところ「バレエ」を習っていたようです。②フェリーボートにのって、学校に通っていたようなので具体的に訳しました。(参考：「On the long ferryboat ride from home in Alameda to school in San Francisco, she drew portraits of fellow commuters」(書籍 The North Shore Literary Trail: From Bradstreet's Andover to Hawthorne's Salem より)】

●#33 〈フェイマス・ファイブ〉シリーズ

* [下] ブライトンの人気シリーズ 3 作品。〈Old Thatch 古い草ぶき屋根の家〉(1934年～)、〈Wishing - Chair 魔法の椅子〉(1937年～)、〈おてんばエリザベス〉(1940年～)【申し送り：原文は p78 キャプション下。原文では「Old Thatch」は 1932 年、「魔法の椅子」は 1936 年、「おてんばエリザベス」は 1948 年になっていますが、3 作品とも本文と年号がちがっていて、ネットで確認したところ本文のほうが正しかったので、本文に合わせて修正しました。ここに表紙が紹介されている本の初版年かと思い調べましたが、それもちがうようです】

* エニード・ブライトン Enid Blyton (1897 - 1968)

【申し送り：Enid はいくつか表記があるのですが、「フェイマス・ファイブ」シリーズ(眞方陽子、忠道訳、実業之日本社)の表記に合わせました】

* 1939 年に〈Circus サーカス〉、〈Amelia Jane アミーリア・ジェイン〉、〈Faraway Tree 魔法の木〉シリーズが出版された。1940 年と 1941 年に、寄宿学校を舞台にしたふたつのシリーズ〈おてんばエリザベス〉【申し送り：『学校一のいたずらっ子エリザベス』(村野杏訳、新学社、1987 年)もありますが、ポプラ社の『おてんばエリザベス』(若林

三江子訳、1986年)のほうがAmazonなどで入手しやすいようでしたので、こちらにしました】と〈おちゃめなふたご〉が続く。

* 4人と1匹というのは、ジュリアンとディックという少年ふたりと、アンとおてんばのジョージ(本当はジョージナだが、そう呼ばれるのをきらっている)という少女ふたりと、ジョージの犬のティモシー(ティム)だ。【申し送り:原文はTimmyですが、眞方陽子訳(実業之日本社)に従いました】はつらつとした若さも、永遠に続くかと思われる夏も、田舎でサイクリングしたり、泳いだり、探検したりする長期休暇もすべて彼らのもの。計画犯罪、秘密の通路、ピクニックなどが冒険をスリリングに盛り上げる。ピクニックのシーンによく出てくる「【たっぷりのジンジャービール/lashings of ginger beer】」というフレーズは、じつは〈フェイマス・ファイブ〉原作のテレビドラマで使われているだけで、本のシリーズの中には一度も出てこない。【申し送り:原文は although, sad to relate, their much quoted taste for“lashings of ginger beer” never featured in a Famous Five story。このフレーズは有名で、ドラマではなく本に出てくると誤解している人が多いようです(ドラマを確認しましたが、ピクニックのシーンで登場人物が、このフレーズを何度か使ってました)。ただし、本のシリーズにもジンジャービールはちょこちょこ出てきて、ピクニックのときなどにフェイマス・ファイブが飲んでます_ <https://famousfivestyle.wordpress.com/2009/07/04/lashings-of-ginger-beer/>このサイトに、このフレーズが本のシリーズには出てこないことが書いてあります】

* ノディの一度みたら忘れられない愛らしい容姿を最初に手がけたのはオランダのイラストレーターのハルムセン・ファン・デル・ベイクだ。【申し送り:原文は his first illustrator, Dutchman Harmsen van der Beek。Dutchman とありますので在東京オランダ王国大使館にメールで問い合わせたところ、上記のような表記が適切とのご回答をいただきました。また、first illustrator の first とあるのは、ノディシリーズがまだ続いているときに Harmsen が亡くなり、別のイラストレーターが担当することになったからです】

* エニード・ブライトンは、驚くほど多作の作家であると同時に、ブライトンブランドの優秀なプロモーターでもあった。その多くのシリーズは、最新作を求めてやまないファン

をたくさん生みだし、何度かペンネームで執筆したときでさえ、読者はだまされなかった。本の裏表紙に「あなたに当てたメッセージ」を載せることで、新刊への興味をそそった。【申し送り：原文は“personalised message” on the back cover。アマゾンのレビューに「I loved the letter on the back cover from Enid in some of the editions」とあるので、実物はみつけれなかったのですが、こういうものは存在するようです】本の表紙などにみられるエニード・ブライトンのサインは、品質保証のトレードマークだった。【申し送り：原文は ubiquitous Enid Blyton signature。調べた資料によると、著者ブライトンの手紙の筆跡と同じ筆跡で、本の表紙や中表紙などに「Enid Blyton」と印刷しており、これのことを指しているのだと思い少し補足しました。原文 p78 の本の表紙にも、このサインがあります】

●#34 『星の王子さま』

* サン=テグジュペリは 20 世紀初頭、フランスの航空時代の草分け的存在として活躍した。フランス陸軍航空連隊【申し送り：原文、French Air Force です。フランス空軍は 1934 年以降とのことなので、こちらの訳語を選びました】で飛行経験を積んだあと、民間の航空会社に就職し、フランスと北アフリカ、またフランスと南米をつなぐ、新たな航空郵便ルートを開拓した。

* サン=テグジュペリ自身はこの事故の体験を自伝的エッセイ『人間の大地』【申し送り：タイトルですが、堀口大学訳『人間の土地』、渋谷豊訳『人間の大地』の 2 種類がありました。ここではより新しい後者を採用しました】(1939 年) に記し、のちに『星の王子さま』の設定のモチーフにした。

* フランス語版『星の王子さま』はサン=テグジュペリの死後、1945 年にフランスで出版された。フランスがドイツに占領されていたヴィシー政権下では、フランス語版が出る前から【申し送り：ヴィシー政権の終焉は 1944 年。アメリカ版は 1943 年にでています】サン=テグジュペリの本は禁書扱いで、これを書いた作者はユダヤ人の擁護者だと強く叩かれた。

●#35 『長くつ下のピッピ』

* 児童文学作品のなかでも根強い人気を誇る『長くつ下のピッピ』は、編集者の選ぶ子ども向けおすすめ本リストの常連だ。2002年にノルウェー・ブック・クラブとノーベル研究所が発表した「世界最高の文学 100 冊」にも選ばれ、幅広い層に親しまれている。【申し送り：原文では、the Nobel Institute と記載されていますが、ノーベル研究所といっしょにノルウェー・ブック・クラブが発表したリストのようです。

<https://thegreatestbooks.org/lists/28>】

* ピッピの場合、母親は亡くなっていて、船長をしている父親は航海の途中で行方不明になった。【申し送り：続編の『ピッピ船に乗る』（1946年）で父親と再会を果たしますが、1巻の時点では行方不明と説明されています。】

* ピッピは、自分のことならひとりでなんでもできた。ところが、船の上で育てられたピッピにとって、陸の上でうまく舵を取るのはひと苦勞。社会の常識がよくわからずに、問題を起こしてばかりいる。近所のきょうだい【申し送り：姉弟です】と友だちになったピッピは、ペットのサルと馬も連れて、どこにいても大暴れ。

* 『長くつ下のピッピ』は、ある出版社に持ちこんで不採用になった。リンドグレーンはその原稿に手を加え、この物語の奇想天外な面白さをさらに強調することにした。その判断は正しく、書き直して出版された本は、1946年にスウェーデンの文学賞を受賞した。

【申し送り：スウェーデンの新聞『スヴェンスカ・ダーグブラーデット』紙の文学賞（Svenska Dagbladet's Literature Award）を指していると思われます。】

* リンドグレーンは、世界で4番目に多く翻訳された児童文学作家だ。同じく北欧出身のハンス・クリスチャン・アンデルセン、ドイツのグリム兄弟、イギリスのイーニッド・ブライトンの次に多い。リンドグレーンの作品はこれまで90か国語以上に翻訳された。【申し送り：複数の英語サイトを確認したところ、1. ブライトン 2. アンデルセン 3. グリム兄弟の順番のようですが、同じく北欧出身のアンデルセンを筆者が強調したいようなので原文のままの順番で訳しています。】

●#36 『機関車トーマス』

* 第一次世界大戦が終わってまだ間もないころ、ウィルバート・オードリー少年は夜になると子ども部屋のベッドのなかで目を開けたまま、機関車の動く音に耳をすましていた。当時住んでいた家【申し送り：オードリー一家は、1917年にウィルツシャー州ボックスに移り住み、ウィルバートは6歳から17歳までこの地で過ごす。ボックス・トンネル近くの家に住み始めたのは、ボックスに引っ越してきて4年目（『機関車トーマスと英国鉄道遺産』秋山岳志、集英社、2010、55）。】のすぐそばにあったのは、悪名高き「ボックス・トンネル」（訳注：全長3キロものトンネルで、傾斜地に建設されているため、機関車にとっての難所だった）。【申し送り：訳注の参考としてこちらのURL先等を参照しました。

http://grandtoit2016.itn21.net/uploads/entry_meta/file_value/784/newsletter_19.pdf

このトンネルはイングランド南西部に位置し、そこを走るグレート・ウェスタン鉄道の蒸気機関車は、補助のタンク機関車と力を合わせなければ、貨物を引っ張りながらその1/100の急勾配を登ることができなかった。【申し送り：登坂用の補助機関車が貨物列車の最後尾に連結して、後ろから押していた。】

* SLファンなら、タンク式機関車はたいがい水用タンクをボイラーの左右に装備していて自力で走れるので、トレーラーや炭水車が必要ないということをご存知だろう。もちろん、クリストファーはこの新しい機関車の物語もききたがった。そこで、この機関車トーマスは、1946年に出版されたシリーズ2作目の絵本に初めて登場することになる。【申し送り：トーマスはタンク機関車で、ゴードンはテンダー機関車。】

* オードリー牧師がソドー島という名前を思いついたのは、「ソドー・アンド・マン教区」という英国国教会の教区名からだ。この教区はかつて、スコットランドの南の島々（「ソドー」は古ノルド語で「南島」の意）とアイリッシュ海上のマン島を管轄していた。この教区はいまも存在してはいるが、スコットランドの島々は管轄から外れ、マン島だけが残っている。【申し送り：教会の仕事でマン島を訪問したオードリー牧師は、「ソドー・アンド・マン教区」でソドーに当たる土地が存在しないことに気が付き、この架空の島こそが物語のための完璧な舞台になると考えたそうです。】

* 最初に出版された絵本（上）のイラストは、ウィリアム・ミドルトンが担当。オードリー牧師はこの絵が気に入らず、のちにレジナルド・ダルビーが描き直した。オードリー牧師は機関車の小型模型を作っていたが、それが原因でダルビーともけんか別れすることになる。ダルビーが、ちびっこ機関車パーシーの模型を無視してイラストを描いてしまったからだ。【申し送り：オードリーは、「実際に起こった事故や、本物の機関車であれば起こり得ることのみを物語のベースにする」ことをポリシーとしており、挿絵にも強いこだわりを持っていたため、イラストレーターが交代を繰り返し、シリーズ 26 冊を通して全部で 5 人（組）が挿絵を担当した。そのうち、1 人目はウィリアム・ミドルトン（1 作で交代）、2 人目がレジナルド・ペイン（1 作で交代）、3 人目がレジナルド・ダルビー（9 作で交代）（『機関車トーマスと英国鉄道遺産』、88-90）。】

* 【申し送り（参考文献）：『機関車トーマスと英国鉄道遺産』（秋山岳志、集英社、2010 年）、

アニメ版日本公式 HP <http://www.thomasandfriends.jp/>】

●#37 『おやすみなさいおつきさま』

* 子どもに対する態度にしても、はっきりしないところがあった。1946 年に、結婚についてきかれたときはこう話している。「まあ、子どもも特に好きではありません。少なくとも、ひとつの集団としては。ただ小さいからといって、わたしは目をつむるつもりはありません」（『ぼくにげちゃうよ』、1942 年）【申し送り：原文には、この部分に書籍情報は載っていませんが、念のため付け加えました。】

* 『おやすみなさいおつきさま』は、幼児が少しずつ眠くなるように話が進んでいく。まずは寝室へと導き、2 行でひとつの脚韻を踏む文で、室内にあるものの説明をする。それから、それぞれのものに順番に「おやすみ」といい、最後に「いたるところの音におやすみ」【申し送り：「おやすみ そこここできこえるおとたちも」：せたていじ訳、評論社】という。

* 創設者のルーシー・スプレイグ・ミッチェルは『The Here And Now Story Book 今ここの物語』【申し送り：アマゾン等では『Here and Now Story Book』と表記されているようです。】を1921年に出版した。

●#38 『アンネの日記』

* 『アンネの日記』 The Diary of a Young Girl 【申し送り：オランダ語の原題は『De dagboeken van Anne Frank』】(1947)

* オットー・フランクは日記を出版することに決め、1947年に『The Secret Annex 隠れ家の物語』【申し送り：オランダ語の原題は『Het Achterhuis』】として世に出した。初版はオットーが手を加えており、両親（特に母親）への批判や性への関心についての記述が削除されていた。削除された部分は、のちの版では復元されている。

●#39 『たのしいムーミン一家』と〈ムーミン〉シリーズ

* 英語版は『Finn Family Moomintroll たのしいムーミン一家』のタイトルで出版された。【申し送り：邦訳はもちろんでていますが、ここは英語のタイトルが分かっていたほうがいいと思ったので、英語のタイトルものせました】

●#40 『カサンドラの城』

* 1930年代【申し送り：原文では pre-war となっているのですが、どの戦争の前かわかりにくいので、『カサンドラの城』（石田英子訳、朔北社）のおびに「1930年代のイギリス」と記載があり、このように訳しました】のイギリスの美しい田園風景を背景に描かれるユーモアあふれる成長物語は、現代的で斬新な設定はあるものの、さながらジェイン・オースティンの小説のようだと思われたにちがいない。

* スコートニーホールは、家主のコットン氏の孫に相続されることになり、裕福でハンサムな兄弟サイモンとニールが、母親とともにアメリカからやってくる。【申し送り：原文

は Scoatney is inherited by the Cotton family, wealthy Americans who arrive with their handsome sons Simon and Neil。訳書によると、コットン氏の末息子はアメリカに渡り、アメリカ市民権をとっており、その子どもがサイモンとニールです。この兄弟はアメリカ生まれ。コットン氏もその息子4人（この兄弟の父親も含め）全員すでに亡くなっているの、この兄弟が相続することになりました】

* 初めは少女だったカサンドラは、物語の終わりでは大人の女性としての自覚を持ち、自分の人生の夢を追求しようと決心する。現代的で斬新な設定が盛りこまれており、カサンドラの父親の再婚相手は裸で自然と触れ合うのが好きな女性として描かれている。【申し送り：原文は sunbathe in the nude となっているのですが、訳書を読むと、継母が裸で日光浴する場面はなく（主人公のカサンドラがする場面はあり）「裸になって素肌で自然と触れ合うのが好き」という表現が何度かくり返されていますので、その表現に変えました】

* スミスはロンドンで、フェイ・コンプトン、レイモンド・マッシー、【申し送り：原文は Massey。リーダーズやランダムの記事に従いましたが、wikiでは「マッセイ」という表記になっています】ジョン・ギールグッドといった当時のスターが出演する戯曲を書いていた。

●#41 『ライオンと魔女』

* C・S・ルイスの作品：〈別世界物語〉3部作シリーズの『マラカンドラ——沈黙の惑星を離れて』（1938年）、『ペレランドラ——金星への旅』（1943年）、『サルカンドラ——かの忌まわしき砦』（1945年）【申し送り 1】、『悪魔の手紙』（1942年）。

【申し送り：ちくま文庫の表記を参考にしました。ちなみに原書房のタイトルは以下のようになっています。

『黙の惑星を離れて——マラカンドラ 火星編』

『ヴィーナスへの旅——ペレランドラ 金星編』

『いまわしき砦の戦い——サルカンドラ 地球編』

● #42 『シャーロットのおくりもの』

* E・B・ホワイト（コーネル大学時代は、大学の創設者アンドルー・ディクソン・ホワイトにちなんで「アンディ」と呼ばれていた）はメイン州に農場を持っていた。スコットランドの国王ロバート1世のように、ホワイトもクモを観察して意欲をかきたてられた（ホワイトの場合は、納屋でクモが糸を吐きだし、たまご袋を紡ぐのをみて）。

【申し送り：原文は E. B. White —or as he was known from his Cornell University days, “Andy”。wiki にホワイトがアンディと呼ばれていた理由がでていましたので補足して訳しました。

2 スコットランドの国王ロバート1世にまつわる次のような伝説があります。「ロバート1世がラスリン島の洞窟に隠れていたときに、クモが天井のある地点から別の地点へ糸をつなげようとしているのを観察し、クモが何度失敗しても成功するまであきらめなかったのをみて勇気づけられた」以上の内容を短くして補足したかったのですが、短くできず、あきらめました（キャプションなので、本文よりもさらに字数制限があると思いました）。

3 たまご袋の原文は egg sac で、さくまゆみこさんの訳を使わせていただきました】

● #43 『床下の小人たち』と〈小人の冒険〉シリーズ

* この世界では、●ブーツ置き場●【ルビ／ブーツラック】家、暖炉の●飾り棚●【ルビ／オーヴァーマントル】家、●雨どい●【ルビ／レインパイプ】家などがある（人間の近くに住んでいるものほど位が高いといわれていて、レインパイプ家のひとりが、応接間で暮らすハーブシコード家のひとりと結婚したときには、出世したといわれた）。【申し送り：①ブーツラックとオーヴァーマントルは、林容吉訳を参考にしました。レインパイプは林容吉訳では「レイン＝パイプ」とされていましたが今回は「レインパイプ」としました。②レインパイプが出世したといわれた理由について、英語にはないですが説明を補足しました】

*メアリー・ノートンは、イギリスにあるレイトン・バザードという町の医者のお嬢で、美しい石造りのジョージアン様式の屋敷で育てられた。〈シダーズ〉と呼ばれたこの屋敷が

クロック一家の最初の家のモデルとなった。すてきな歴史の偶然がおこり、今ではその建物に（それほどでもない）ちっちゃな人々、つまりレートン・ミドル・スクールの生徒たちがいる。【申し送り：下記の URL にその学校がのっていましたので、ご参考までに。

[\(https://www.leightonlinlade-tc.gov.uk/mary-norton/\)](https://www.leightonlinlade-tc.gov.uk/mary-norton/)】

* 〈魔法のベッドかざり〉シリーズの続編『魔法のベッド過去の国へ』は、1947 年に出版された。1957 年に両作品は 1 冊にまとめられ、それぞれのタイトルを組み合わせた『*Bedknob and Broomsticks* ベッドかざりとほうき』【訳注／1 作目の原題は『*The Magic Bedknob* (魔法のベッドかざり)』で、2 作目の原題は『*Bonfire and Broomsticks* (かがり火とほうき)』】というタイトルで出版され、ウォルト・ディズニーの目にとまった。その頃、ディズニーは P・L・トラヴァースとの間で、『メアリー・ポピンズ』の映画化権をめぐる交渉が長引いていた。ディズニーはそのかわりとなる作品として、『*Bedknob and Broomsticks* ベッドかざりとほうき』の映画化を思いつき、『メアリー・ポピンズ』の制作チームにこの作品を任せることにした。ディズニー映画の作詞作曲家で知られるシャーマン兄弟が歌をつくり、『メアリー・ポピンズ』で父親役を演じたデイヴィッド・トムリンソンがエミリアス・ブラウン教授役に選ばれた。新米魔女のミス・プライス役には当初、女優ジュリー・アンドリュースが候補にあがっていた。1961 年、ようやく『メアリー・ポピンズ』の映画化が許可され、そのせいで『ベッドかざりとほうき』は『メアリー・ポピンズ』とあまりにも内容が似すぎているとして制作が延期になってしまう。【申し送り：原文に *the slightly retitled Bedknobs* 「本のタイトルが若干変更された」とあるように、もともとは『*Bedknob and Broomsticks*』で、変更後は『*Bedknobs and Broomsticks*』です。bedknob に s がつくかつかないかの違いです。日本語訳だとわかりにくいのでその部分の英語は訳していません】映画がなんとか完成したのは 1969 年のことだった。【申し送り：原文は *and in 1969* となっていますが *and* は原文のまちがいです。ちなみに、映画の公開は 1971 年のようです】

●#44 『ちいさなうさこちゃん』と〈うさこちゃんの絵本〉シリーズ

* 『ちいさなうさこちゃん』と〈うさこちゃんの絵本〉シリーズ

Miffy (1955 年) and series

【申し送り：オランダで1955年に出版された『ちいさなうさこちゃん』は、現在出版されている同タイトルの絵本のもとになった作品。ストーリーは同じだが、絵本の形やミッフィーの姿が今とは異なる。この初版は日本では邦訳されておらず、邦訳されている『ちいさなうさこちゃん』（石井桃子訳、福音館書店、1964年）は、1963年に出版された第2版。（参照：『ディック・ブルーナ ぼくのこと、ミッフィーのこと』、講談社編、講談社、2005年）】

* はじめからブルーナは、限られた絵の具の色——黒、白、赤、黄、青、緑、オレンジ、茶——しか使わないことに決め、影は一切入れなかった。【申し送り：三原色の赤・黄、緑、輪郭を描く黒の4色から始まり、グレーと茶色を使うようになったと本人は言っている。（『ディック・ブルーナ ぼくのこと、ミッフィーのこと』、ディック・ブルーナ、講談社、2005年、95）】

* また、ミッフィーのシンプルな構図に影響を与えたのは、21世紀前半に起こったオランダ発祥の抽象芸術運動「デ・ステイル」だ。芸術家ピエト・モンドリアンや建築家ヘリット・リートフェルトなどがこの運動の中心となっていた。ブルーナは当時まだ幼く、この「デ・ステイル」運動の最初のムーブメントに参加することはなかった。【申し送り：運動が興ったのが1917年で、ブルーナは当時10歳。】

* ブルーナはまず父親の出版社で働いた。祖父が最初に立ち上げ、〈A・W・ブルーナ&ズーン社〉（A. W. Bruna & Zoon の Zoon はオランダ語で「息子」の意）として父が引き継いだ会社だ。【申し送り：祖父が立ち上げた当初はおそらく「A・W・ブルーナ」社として立ち上げ、ブルーナの父に引きつぐ段階で社名を変更したようです。英語・オランダ語サイトを複数確認済み】そこで、2000冊以上ものペーパーバックの装丁を手がけ、シェイクスピア作品のほか、さまざまな探偵小説も担当した。ブルーナがオランダ語版の装丁をデザインした探偵小説には、ジョルジュ・シムノンの〈メグレ警部〉シリーズや、レスリー・チャータリスの〈セイント〉シリーズ、レイモンド・チャンドラーの〈フィリップ・マーロウ〉シリーズ、イアン・フレミングの〈007〉シリーズなどがある。

* ブルーナのオリジナルキャラクターであるミッフィーはとりわけ日本での人気が高く、

1974年に日本で誕生したハローキティはミッフィーに驚くほど似ている。ブルーナは2010年に、あるキャラクターをめぐって、ハローキティを生み出した〈サンリオ〉を相手に訴訟を起こし、勝訴した。問題となったのは、キティの仲間のキャシーで、このウサギのキャラクターはミッフィーにそっくりだった。2011年になると一転、ブルーナの著作権を管理する〈メルシス社〉と〈サンリオ〉は係争中の訴訟をすべて取り下げてたちまち和解する。【申し送り：原文にない言葉を少々補って訳しています。】両社は訴訟に伴う費用をすべて、その年に起きた東日本大震災への義援金として寄付することで同意したのだ。

* ミッフィーの名前は、ペルーで2008年に発見された新種のチャタテムシにまで使われた。チャタテムシは古い本の装丁に使われているのりを食べる虫のこと。この新種は、その{肛上片/ルビ：こうじょうへん}という尾のような部分がうさぎに似ていることから「*Trichadenotecnum miffy* トリチャデノテクナム・ミッフィー」と名付けられた。【申し送り：カタカナ表記が見つからなかったため、発音サイトで確認したものをカタカナに直しています。】しかし、ミッフィーの人気ぶりが何よりもよくうかがえるのは、ブルーナの故郷ユトレヒトにある広場の名前だろう。ミッフィーの小さな像【申し送り：この像の製作者は、ブルーナの次男マルク。】が飾られたこの広場は、「the Nijntjepleintje ナインチェ・プランチェ」と名付けられた。オランダ語で韻を踏んだこの名前は、日本語で「ミッフィーの小さな広場」を意味する。【申し送り：日本語訳では、原文の *might very loosely be translated “the little hare square”* の部分を省力して、日本語の意味を記載しました。】

【申し送り：主な参考文献 『ディック・ブルーナのすべて』（講談社編、講談社、1999年）、『ディック・ブルーナ ぼくのこと、ミッフィーのこと』（講談社編、講談社、2005年）、ミッフィー日本公式HP <https://www.dickbruna.jp/miffy/index.html>】

●#45 『虫とけものと家族たち』

* コルフ島での4年間、ジェラルドは学校に通わず家庭教師に勉強を教わった。「授業」がないときは島を歩き回り、動物の生態を調べた。その手ほどきをしたのが、生き物や自

然のことにとても詳しい学者のセオドア・ステファニデス【[申し送り：池澤夏樹訳、2014年初版の中公文庫 p.99 で確認しました](#)】。

* 動物園を、世界中から集めた珍しい動物や美しい動物をみせるためだけに作ってはならない——この信念は揺るがず、動物を動物園で飼っているのは、野生環境で保護する手立てがなくなったときだけにすべきだと、かたく信じていた。

この考え方は当時論争を引き起こし、多くの動物園がこれに反発した。そのひとつにロンドン動物園があったが、じつはここでジェラルドはある時期、働いていた。この運動をほとんどひとりで、自分なりに、真剣に行なった【[申し送り：とにかく人と協働して動くのを嫌い、生涯独身を貫いた、という情報を複数サイトで確認しました](#)】。

* 兄のラリー（作家のローレンス・ダレル）はコルフ島では妻のナンシーとふたりで暮らしていたし、この夫婦が、ダレル一家が住んだアネモヤニ荘【[申し送り：本校の原文、Anemoyanni](#) ですが、原書にこの記述はありません。[Facebook の Corfu Forum](#)（コルフ島に関するグループフォーラム）に、この家は原作の「[Daffodil Yellow Villa](#)”水仙のような黄色の家”」のモデルで、ダレル一家が実際に住んでいた、という記述がありました】にいたのはほんの2、3ヶ月で、その後は自分たちのコテージにもどっていた。

●#46 『赤い風船』

* 『赤い風船』【[申し送り：1957年に出版された、映画を小説化した原書の邦訳書はないようです。日本語で読めるのは、おそらく「アルベール・ラモリス『あかいふうせん』岸田衿子文、いわさきちひろ絵、偕成社、1968年」だけだと思います（DVDと絵本どちらも確認したところ、だいたい内容は同じですが、少しちがう箇所もあります）。本文では映画の内容がおもに紹介されていますので、表記はDVDに合わせて『赤い風船』としました](#)】

* 最後の場面で、赤い風船は丘の上の空き地で、年上のいじめっ子に石を投げられ、踏んづけられて割れてしまう。【[申し送り：原文は boys destroy the balloon。DVDでは、赤い風船が、いじめっ子がパチンコで投げた石を当てられ、だんだん弱って地面に落ち、それ](#)

をいじめっ子が踏んづけて割る、という描写でしたので、このように訳しました】だが、たくさんの風船がパリのあちこちから集まってきて少年のそばに舞い降り、満ち足りた顔の少年を空へと連れていく。

* 家族で楽しめるこの冒険映画では、ブルターニュからフレンチ・アルプスへとフランスじゅうを気球で移動する。ヴェネツィア国際映画祭で OCIC 賞を受賞。【申し送り：原文は won an award at the Venice Film Festival。wiki などによると、1960 年に OCIC Award を受賞とあり、どう表記していいかわからなかったのですが、金原先生に確認したところ、とりあえず「OCIC 賞」でとのことでした】

●#48 『みどりいろした たまごとハム』

* この本は、子どもが自分で読んでも面白いが、大人が読みきかせても楽しい【申し送り：2010年にオバマ大統領が子どもたちに読み聞かせている動画もありました。動画の最後に朗読をし終わったオバマ大統領夫妻がこの本から学べることについて、「美味しくなさそうなものを勧められても（例として、ブロッコリや豆）、とにかく食べてみることに！と子どもたちに伝えているところが興味深かったです。

<https://youtu.be/imFTk5exiDY>】【申し送り 2：その後、ゲラチェックをされていて、センダックを担当された佐々木さんとのやり取りでわかったこと。1878年から続いているホワイトハウスでのイースターズロールでオバマ大統領夫妻は、センダックの本を複数回選び、招待した子どもたちの前で朗読している。本を選ぶのはファーストレディーが担当することになっているとか（2020年はCOVID-19の影響によりキャンセルになったというメッセージを、メラニア夫人が動画で発表している）。大統領による朗読本リストは残念ながらみつけれなかったが、ミシェル・オバマのお気に入り子どもの本リストには、センダックやこのドクター・スースの本が名を連ねている。

<https://readingagency.org.uk/children/news/childrens-books-loved-by-michelle-obama.html>】。

* ドクター・スースの本は世界で6億部売れ、20か国語に訳されている。食いしん坊なら、別作家によるスピンオフ作品『みどりいろした たまごとハムのクックブック』をみ

つけたら、まちがいなく喜んで飛びつくだらう。【申し送り：

<https://www.amazon.com/Green-Eggs-Ham-Cookbook-Inspired/dp/0679884408>。邦訳は
みつけれませんでした】

●#50 『ウィロビー・チェースのおおかみ』

* 第2次世界大戦中とその後、エイキンが1942年の連合国共同宣言のあとに設立された国際連合広報センター（UNIC）【申し送り：原文は「United Nations Information Unit (UNIC)」となっていますが、「United Nations Information Center (UNIC)」の間違いだと思われます。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B8%E3%83%A7%E3%83%BC%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%A8%E3%82%A4%E3%82%B1%E3%83%B3>

（wiki）で、「作家になる前はBBCと国際連合広報センターで仕事をしていた」と記載されています。国際連合広報センター＝United Nations Information Centre】

●#51 『ぼくと原始人ステッグ』

* 『ぼくと原始人ステッグ』は、1964年にBBCの学校向けラジオ用の番組として放送された。しかし、その人気が一気に広がったのは、同じくBBCの子ども向けバラエティ番組『Blue Peter ブルー・ピーター』【申し送り：1958年から放送を開始した、イギリスの子供向け長寿番組。】でテレビシリーズ化されてからだった。

●#52 『かいじゅうたちのいるところ』

* この絵本が生まれたのは、ひとえにモーリス・センダックが馬の絵を描けなかったおかげだ。【申し送り：カタカナの「ウマ」だと違和感があるので、この作品では「うま」と「馬」を使っています。】

* モーリス・センダックは『ケニーのまど』（1956）で絵本作家としてデビューし、『The Land of Wild Horses やせいのうまたちのくに』【申し送り：「もともとは『Where the

Wild Horses are やせいのうまたちのいるところ』として企画された」と書かれているものが多いようです。】の制作に取りかかった。

* ホワイトハウスの芝地で行う、毎年恒例のイースターエッグロール（卵転がし）のときに、モーリス・センダックの絵本を読むバラク・オバマ前大統領とミシェル夫人。イースター・マンデー（復活の月曜日）に催されるこのイベントは、1878年に、ラザフォード・B・ヘイズ第19代大統領によって始められた。オバマ一家はこの特別な1冊を読むことを恒例行事にした。【申し送り：オバマ前大統領は任期中のイースター・エッグロールで、8回中少なくとも6回は『かいじゅうたちのいるところ』の読み聞かせをしています。娘さんたちが読んでいる年もあります。参考：

https://www.youtube.com/watch?v=FE_7T-TQ7WQ】

●#53 『チョコレート工場の秘密』

* 絵本作家のドクター・スースは、初めての絵本『Great Day for Up! 目を覚まして! さあ上へ!』【申し送り：ユーチューブでみたところ、朝、太陽がのぼり、みんなが目を覚まし、木や山やはしごやエレベータにのぼっていくお話の絵本でしたので、このような題名をつけました】（1974年）の挿画を、自分で描くのではなくブレイクを信頼して任せた。

* 学校からさほど遠くないところに、〈キャドベリー〉社のチョコレート工場があり、生徒は新製品のチョコレートの感想を書くのと引きかえに、チョコレートをただでもらえて味見ができた。【申し送り：原文は at Repton School in Derbyshire, one of several used by chocolate manufacturer Cadbury to test new products。この箇所、原文のままだとよくわからなかったので、『「チョコレート工場」からの招待状』（チャールズ・J・シールズ著、水谷阿紀子訳、ぶんけい）や『少年』（ロアルド・ダール著、永井淳訳、早川書房）に記載してあったことを参考にし、補足しながら訳しました】この時代の学生生活で特筆すべきことは、教師によるむち打ちの罰と上級生によるいじめが正当化されていたということだ。このイギリスのパブリックスクールでのひどい経験が、ダールの作品に登場する多くの悪役の原型になっている。それに対して、作品の中で善良さと無邪気さを具現化し

ているのは、つねに子どもであり、『チョコレート工場の秘密』では、チャーリー・バケツがそのいい例だ。【申し送り：「チャーリー・バケツ」、「黄金切符」「ウィリー・ワンカ氏」、祖父の「ジョウ」、「永久ぺろぺろキャンディー」の表記は『チョコレート工場の秘密』（猪瀬尚紀訳、評論社）の表記をそのまま使っています】

* ダールの想像力はノルウェー人の両親によって育まれた。両親がダールに語った、トロール、ゴブリン、水の精霊などが登場する北欧の民話は、イギリスの民話よりも総じて暗い。その影響の大きい作品が『魔女がいっぱい』だ。魔女が英国児童愛護協会【申し送り：原文は National Society for the Prevention of Cruelty to Children。リーダーズプラスに「全国児童虐待防止協会」という訳語が出ていたのですが、『魔女がいっぱい』（清水達也・鶴見敏訳、評論社）の訳語「英国児童愛護協会」を使いました】と偽って集会を開き、おそろしい計画を立てる。この作品は、ノルウェーとイギリスの両方が物語の舞台となっている。

●#54 『おちやのじかんにきたとら』

* この物語では、小さな女の子ソフィーと母親がお茶の時間にしようとしていると、突然トラがやってくる。そして、トラは食べ物も飲み物もすっかり平らげて去っていく。帰宅したソフィーの父親はその話をきくと、ソフィーと母親をレストランに連れていく。翌日、ソフィーと母親は食料を買いに出かけ、トラの食べ物も買っておくのだが、トラがもどってくることはない。【申し送り：（この絵本では）買い物に出かけるのは「翌日」のことなので、原文にはありませんが一応入れてあります。】

●#55 『ウォンブル大かつやく』と〈ウォンブル〉シリーズ

*初版『ウォンブル大かつやく』の表紙の絵は、マーガレット・ゴードンが描いた。【申し送り：「ウォンブル」の表記について。1985年出版の八木田宜子訳では「ウォンブル」とありましたが、物語から派生したバンド「ウォンブルズ」は小さい「オ」の表記されているものが多くみつかったので、「ウォンブル」で統一しました】

* 1970年代初めまで、ロンドン郊外のウィンブルドン、ローン・テニス・トーナメントの開催地としてしかほとんど知られていなかった。エリザベス・ベレスフォードが描いた、ウィンブルドンコモンに暮らすウォンブルや、彼らが持ち歩いているリサイクル用の手さげ袋によって、ウィンブルドンのイメージは決定的に変わった。【申し送り：ウォンブルは人間の落としたゴミや忘れ物をいれる手さげ袋を持ち歩いているので、説明を加えました。下記のサイトにあるWの文字が真ん中にはいった手さげ袋のこのようです
<https://www.youtube.com/watch?v=e.jn-46F47Pc>】

* ウォンブルのアイディアは、ベレスフォードが1967年12月26日のボクシングデーに家族で散歩中、娘がウィンブルドンコモンをまちがって「ウォンブルドンコモン」と何度も発音していたのをきっかけに生まれた。【申し送り：「ウォンブルドンコモン」は原文にありませんが、下記の情報を参考に訳しました。Kate, who now lives in West Sussex, was a little girl when she mispronounced 'Wimbledon' as 'Wombledon' on a walk with her mother Elisabeth on the famous common.

(<https://www.dailymail.co.uk/news/article-7647061/Wombles-authors-daughter-gives-late-mothers-toys-memorabilia-charity.html>) / Elisabeth Beresford was inspired to create the Wombles by her daughter's mispronunciation during a Boxing Day romp across Wimbledon Common.

(https://en.wikipedia.org/wiki/The_Wombles)】ウォンブルの下の名前は、家族旅行で行った場所からつけられ、それぞれの性格は作者自身の家族をイメージしてつくられた。たとえば、食いしん坊のオリノコ【訳注／南米の川の名】は息子、ブルガリア大おじさんは義理の父がモデルだ。【申し送り：「食いしん坊」は原文にないですが、オリノコからはじまると唐突な気がしたので小説を読んで説明を補足しました】主人公ブンゴ・ウォンブル【訳注／ブンゴは大分県にあった旧国名●豊後国●(ルビ：ぶんごのくに)に由来】は、娘からインスピレーションを得て生まれた。【申し送り：八木田宜子訳では、ブンゴは「アフリカの地名に由来」と説明してあったのですが、調べてみると日本の地名に由来しているようです。(参考①：Bungo chose his name when he pointed to a place in Japan <https://www.tidybag.uk/information/whos-who-in-the-wombles/>)。また Wiki はあまりあてになりませんが、Wiki でもそのように説明してありました

(https://en.wikipedia.org/wiki/The_Wombles)。】

* ウッドといえばアニメーターの先駆者で、セルジュ・ダノの『The Magic Roundabout マジック・ラウンドアバウト』、マイケル・ボンドの『くまのパディントン』やその次の世代に向けた『ポストマン・パット』といったストップモーション・アニメのシリーズ制作に携わっていた。【申し送り：Serge Danot は「セージ・ダノット」という表記も見つけました。フランス人なので、フランス語読みで「ダノ」にしました】

●#56 『みんないちにち、なにしてる？』

* リチャード・スキャリー 【申し送り：シリーズ他の本の作者姓表記、「スカーリー」と「スキャリー」と2種類あります】

* 子どもの本で、資本主義の経済のしくみを1から教えてくれる本なんて、めったにない。リチャード・スキャリーの『What Do People Do All Day? みんないちにち、なにしてる？』はそれをやってのけた貴重な本だ。そこで絶妙なタッチで描かれているのは、かわいい動物がところせましと登場する町、その名も「ビジータウン」【申し送り：作品によって、「ビジー町」、「ビジータウン」、と2種類の表記が使われています。ちなみにこのあとの本文で、busyness とにぎやかさをかけたただじゃれがでできます】。アメリカのにぎやかな小宇宙だ。

ビジータウンは、スキャリーの人気作品の多くで舞台となっている。スキャリーの絵の魅力は、絵本でありがちな大胆なタッチや素朴な線ではない。にぎやかな雰囲気 (busyness) だ。

* たとえば、農夫であるヤギのアルファルファはあまった作物を店屋のネコに売り、ネコはそれをビジータウンの町の人々に売る。また、農夫のアルファルファは作物を売ったお金で、仕立て屋を営むネズミのスティッチ【申し送り：この動画の0:20あたり、画面左寄りに登場します <https://youtu.be/yTjwiloPRg0>】に新しいスーツを仕立ててもらい、農機具を売っているキツネ【申し送り：同じく0:20あたり、スティッチの右隣】から新しいトラクターを買い、それでまた畑で作物をたくさん作ろうとする。残ったお金は、銀行に預ける。【申し送り：同じ動画の0:45から0:52にかけて紹介されています】

【p.126】#57 『はらぺこ あおむし』

* エリック・カール Eric Carle (1929 -)

【申し送り：『はらぺこ あおむし』(もり ひさし訳、偕成社)の表紙では「エリック＝カール」という表記なのですが、偕成社のホームページでは、「エリック・カール」となっていますので、中黒にしました】

* ある日曜日の朝、ちっちゃな卵から、ちっぽけなあおむしが生まれる。お腹がぺこぺこのあおむしは、それから7日間食べつづけ、【申し送り：原文は six days となっているのですが、『はらぺこ あおむし』の訳書と原書で確認したところ、翌日の月曜日から日曜日までの7日間でしたので修正しました】お腹はいっぱいになって体もどんどん大きくなり、やがて、さなぎになる。そして2週間が過ぎたころ、さなぎの皮を脱いで出てきたときには、もうあおむしではなくなっている。【申し送り：原文には two weeks later とあるのですが、『はらぺこ あおむし』の原書で確認したところ、for more than two weeks となっていました。偕成社のもりひさし訳では、この部分は「なんにちも ねむりました」となっていて2週間という訳語は使われておらず迷ったのですが、原書に合わせました】

* エリック・カールは、ニューヨーク州中部のシラキユースで、ドイツ移民の家に生まれた。6歳のときに、【申し送り：原文には「6歳のときに」とは書いてないのですが、エリック・カールの公式サイトの情報をもとに、このように訳しました】家族とともにドイツに移住。第2次世界大戦中、父はドイツ軍に徴兵されたのちロシア軍の【捕虜／ほりよ】となり、カールは15歳のとき、軍の仕事で【塹壕／ざんごう】を掘らされた。【申し送り：この箇所、調べはつかなかったのですが、原文のままに訳してあります】

<https://authorstudyeric.weebly.com/biography.html> その後落ち着いて調べましたところ、こちらの Eric Carl 公式サイトにカールが15歳のときに塹壕を掘らされたことが出ています。父親のことは wiki に出ています。 https://en.wikipedia.org/wiki/Eric_Carle】

* 1952年、ようやくアメリカにもどったカールは、「ニューヨークタイムズ」紙や広告業界でグラフィックデザイナーとして働くようになる。カールが広告に描いたロブスターが

絵本作家のビル・マーチン【[申し送り：原文は Bill Martin Jr.なのですが、偕成社のホームページの表記に従いました](#)】の目に留まり、マーチンは自作の絵本の絵をカールに任せることにした。

* カールは工夫をこらしたユニークな本が好きで、それはドイツの絵本の獨創性に影響を受けているからだといっている。【[申し送り：19世紀に活躍したドイツの絵本作家ロタール・メッゲンドルファーは、しかけ絵本の元祖といわれているらしく、そういった作家に影響を受けているのだと思いました](#)】

* カールの絵本には、ページを通常とは異なった形に切り取ったものも多く、こういった絵本をつくるには従来とはちがう印刷技術が必要になる。『はらぺこ あおむし』では、ページに描かれた食べ物をあおむしが食べたという設定で穴が開いているが、この穴を開けてくれる印刷所をアメリカではみつけられなかったため、初版は日本の印刷所で印刷することになった。【[申し送り：偕成社のホームページに、このあたりのいきさつが書いてあり、それを参考にして訳しました](#)】

●#58 『神さま、わたしマーガレットです』

* ジュディ・ブルーム Judy Blume (1938 -)

【[申し送り：長田敏子訳（1982年）では「ジュディ=ブルーム」でしたが、同作家の他作品の邦訳では中黒で表記されているものもありましたし（例『いじめっ子』）、今は中黒のほうが一般的だと思ったので、中黒としました](#)】

* デビュー作『ぼくはみどりのカンガルー』（1969年）は、かまってもらえない、3人きょうだいの真ん中の男の子の物語だ。【[申し送り：国会図書館のHPの内容説明をよんで、兄と妹に挟まれた3人きょうだいの真ん中とわかりました（参考：<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000001639553-00>）](#)】

* マーガレットは11歳で、母親はキリスト教、父親はユダヤ教だ。【[申し送り：作品を読んだところ、両親は宗教のちがいのために結婚を反対され、駆け落ちしています。結婚後](#)

は無宗教となっていますが原文通りに訳したほうがわかりやすいと思ったのでそのまま訳しました】

* マーガレットは、仲良しの女の子たちのなかでも発育が遅いほうで生理もこないの、自分は普通ではないのではないかと不安になる。【申し送り：マーガレットは生理がこないことをとても心配しており、物語のキーポイントになるので原文にはないですが「生理もこないの」を補いました】

* マーガレットはどん底まで落ちこんだとき、神さまに話しかけるのをやめてしまうが、最後には、初潮を迎えて、ふたたび神さまにこう話しかける。「神さま、あなたはそこにいるのですね。なにがあっても、あなたはこのことを見のがさないはずですよ」【申し送り：長田敏子訳では、「あなたがそこにいらっしゃるのは、わかっています。なにがあるろうと、このことを、神さまが見のがすはずはけっしてありませんよね」となっています。原文どおりに訳しましたが「このこと」というのは初潮がきたことを指しています】

* 2015年には、死というテーマに向き合い、『In The Unlikely Event ありそうもない出来事』を書いた。連続飛行機事故について書かれた一般向けの小説で、ブルームが子どもの頃、故郷の近くで、58日間のうちに3回連続して実際に起こった飛行機事故にもとづいている。【申し送り：事故は3回起こったようなので、具体的な数字を記載しました（参考「Now, in her first novel for adults in 17 years, she uses her own young life as source material, revisiting a time when three planes crashed over eight weeks in her hometown, during an indelible period of history」 URL：<https://www.nytimes.com/2015/05/31/books/review/judy-blumes-in-the-unlikely-event.html>）】 歯科医だったブルームの父は、犠牲者の歯から身元をわりだすという気のめいる仕事を引き受けることになった。ブルームはその記憶を頭のなかから消し去っていたが、ついに本に記すことにしたのだった。

●#60 『ミスター・ティックル (コチョコチョコくん)』

* 『ミスター・ティックル (コチョコチョコくん)』【申し送り：株式会社サンリオのホーム

ページを参考にし、キャラクターの名前は基本的に初出のみ、英語読みと日本語読みを両方記載することにしました。(<https://www.ilovemrmen.jp/character.html>
<https://www.ilovemrmen.jp/movie.html>) ちなみに、たむらりゅういち訳で『くすぐりくん』(1976年)のタイトルで出版されていますがいまでは絶版になっているようです】

* ロジャーはほかにも、『Walter the Worm ミミズのウォルター』や〈John Mouse ネズミのジョン〉のシリーズ絵本を描いている。【申し送り：Walter the Worm は見つかったのですが、原文にある Walter Worm は見つかりませんでしたので、このように訳しています。ちなみに、『Walter the Worm』はミスターメンのシリーズのなかの1冊だったので、シリーズ名はとりました(参考：

https://www.amazon.co.jp/dp/B07G1387YW/ref=dp-kindle-redirect?_encoding=UTF8&btcr=1) また、ロジャーは他にも『Once Upon a Worm』というミミズの話を描いているのですが、このミミズは名前ではばれておらず、ここでいう「Walter Worm」のことをいっているのではないと思われました】

* ロジャー・ハーグリーブスのほかのシリーズ作品：『Mr. Men ミスターメン』(1971年)、『Little Miss リトルミス』(1981年)、『Walter the Worm ミミズのウォルター』(2018年)【申し送り：原文は「Walter Worm」ですが、書籍を確認したところ『Walter the Worm』となっていました】、〈John Mouse ネズミのジョン〉シリーズ(1973年)【申し送り：シリーズ名なのでシリーズ名を付けました。また、このシリーズはどの本も Amazon で調べたかぎり、1973年に出版されているようです

(https://www.amazon.com/s?k=John+Mouse+roger+hargreaves&i=stripbooks-intl-ship&ref=nb_sb_noss)、〈Timbuctoo ティンブクトゥ〉シリーズ(1978年～1979年)【申し送り：〈ティンブクトゥ〉シリーズは wiki 情報で申し訳ないのですが、1978年から1979年にかけて出版されているようですので補いました】

●#61 『メグとモグ』と〈メグとモグ〉シリーズ

* ヘレン・ニコル、ジャン・ピエンコフスキー

Helen Nicoll (1937 - 2012)、Jan Pieńkowski (1936 -)

【申し送り：『メグとモグ』ふしみみさを訳では「ヤン」でしたが、**Haunted House**の章とあわせて「ジャン」にしました】

● #62 『ウォーターシップ・ダウンのウサギたち』

* アダムズはこの作品をいつも、ウサギがぞろぞろ登場するだけの話だと言い張っていたが、そこで起きる出来事や独特の設定【申し送り：原文、**characterisations** ですが、これはキャラクター設定というだけではなく、章の冒頭の引用文など形式・様式へのこだわりを指すもの、と解釈しました】は、古代ギリシャ・ローマ時代の名作、叙情詩『オデッセイア』や『アエネイド』のような雰囲気を漂わせている。

* 一行はアナグマ【申し送り：原文、**badger** です。神宮輝夫訳、評論社、2006年 p.55で確認しました】や車に行く手を阻まれ、危険な目に何度もあいながらもなんとか、ウォーターシップ・ダウンにたどり着くがこのあと、この地で安心して長く暮らせる集落を作り、近くに住む攻撃的なウサギの群れから仲間を守らなければならない。

* アダムズは国家公務員【申し送り：原文、**British Civil Service** でした。訳次候補は「官僚」です】として働きつつ、時間をみつけては娘のジュリエットとロザマンドに読みかせる短い話を書いていたのだ。

* 南北戦争が舞台の歴史小説『**Traveller** トラベラー』（1988年）【申し送り：1（エル）ふたつの綴りです】は、合衆国側の北軍と戦った南軍のロバート・E・リー将軍が乗った馬の視点から語られる。タイトルは、この馬の名だ。

● #64 『ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会』

* 『ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会』**The Butterfly Ball and the Grasshopper's Feast** (1973)

【申し送り：「復刻 世界の絵本館——オズボーン・コレクション」（ほるぷ出版）に『ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会』ウィリアム・ロスコー作（『くじゃく家の祝宴』ド

ーセット夫人作とセット) があり、英語の本なのですが、別紙で邦訳がついています。表記はこちらに従いました。アラン・オールドリッジ、ウィリアム・プルーマー版のほうは邦訳はないと思います。原書はアマゾンの中古で手に入りました】

* ヴィクトリア朝の著名な奴隷制度廃止運動家による一風変わったファンタジーから、ロックバンドのディープ・パープルのメンバーによるロックオペラまで、『ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会』は2世紀以上もの間、様々な装いで若い人たちを楽しませている。

【申し送り：ヴィクトリア朝の著名な奴隷制廃止運動家の原文は a prominent Victorian anti-slavery campaigner。2世紀以上とありますし、本文の内容からウィリアム・ロスコーを指すと思うのですが、ロスコーは(1753年生まれ - 1831年没)で、ヴィクトリア朝は1837 - 1901年で、ロスコーはヴィクトリア朝に入る前に亡くなっていますので、Victorian というのはおかしいと思ったのですが、とりあえず原文どおりに「ヴィクトリア朝の」としました。「ヴィクトリア朝に影響を与えた」というような意味かもしれません。「ヴィクトリア朝的な作風」かとも思いましたが、手元にある『ちょうちょう〜』原書のみをかぎり、そんな感じではありません。あるいは著者のまちがいかもしれませんので、「ヴィクトリア朝の」はとってでもいいかもしれません。原書の完成本で確認しましたが、この箇所に変更はありませんでした】

* サイケデリックでくらくらするほど色彩に富んだ挿画のついた『ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会』の新しい版に、子どもたちは心を奪われ何時間も見入った。巻末には登場する動物や昆虫についての詳しい注釈が、本文にはクイズもあり、【申し送り：原文は There are natural history notes at the back and puzzles to be solved in the main text。オールドリッジとプルーマー版の Butterfly Ball~の原書を取り寄せて確認したのですが、巻末には「Nature Notes」という見出しで、本文に登場する動物や昆虫の詳しい説明が載っています。クイズは本文にあり、巻末にその答えが載っています。原書で確認したことをふまえて少し補足して訳しました。ロスコー版も原書を手に入れたのですが、文章はとても短く、プルーマーの文章がとても長いので、ロスコー版のエッセンスだけを取り入れたという感じです】50年近くたった今でも子ども向けの本として人気がある。

* また、ロスコーによるこの物語詩には、続編がある。それらはロスコーが存命中に出版されているが、作者はロスコーではなく、当時子ども向けの詩人として人気のあったキャサリン・アン・ドーセットだ。作品名は『くじゃく家の祝宴』(1807年)、『The Lion's Masquerade ライオンの仮装舞踏会』(1807年)、『The Elephant's Ball and Grand Fête Champetre ゾウの舞踏会と田舎の祝宴』(1807年)。さらにオールドリッジも続編を手がけている。作品名は『The Peacock Party くじゃくのパーティ』(1807年)、『The Lion's Cavalcade ライオンのパレード』(1807年)だ。

【申し送り：原文は p140、Two follow-ups to Roscoe's original poem were published during his lifetime, not by Roscoe but by Catherine Ann Dorset, a popular children's poet of the time: The Peacock "At Home" (1807), The Lion's Masquerade(1807)and The Elephant's Ball Grand Fete Champetre(1807). (英語の完成本で確認しましたが、この箇所に変更はありませんでした)

この箇所に関して、問題点が2点あります。1点目は、ロスコーの原作には続編がふたつあり(Two follow-ups)」とありますが、その後、作品名が3つ紹介されていることです。Wikiに次のような記述があります。

Two anonymous sequels were The Peacock 'At Home' and The Lion's Masquerade and the Elephant's Champetre, both initially credited to "A Lady", and describing similar parties for birds and large mammals. The Peacock 'At Home' was very popular and the 1809 edition revealed the author to be Catherine Ann Dorset[1]

wiki ではアンダーラインの and がイタリックですし、そのあとに both とありますので、Lion と Elephant は1作品ととらえているような気がしますが、原書の本文(この申し送りの上のほうに記載してある文)は and はイタリックではありませんので、別々の作品ととらえているように思え、よくわかりません。Lion も Elephant も原書が読めたのでどちらも読みました。Lion のほうの話の内容は、ライオンが主催する仮装舞踏会に動物たちがたくさんやってくるという内容で、ゾウはシャムの王様の格好をしてセイロンからやってきます。ホスト役のライオンの隣の席にすわってとても目立っています。Elephant の話の内容は、挿画によると Lion に出てきたのと同じと思われるゾウが開く舞踏会に、ライオンも含め大勢の動物たちがやってくるという設定です。体裁は、ふたつの話を合わせて1冊になっているのではなく、2冊別々のようです。話が対になっているので、2冊セットで1話として売りに出されたので、「続編がふたつ」となっているのかもしれない

ん。この著者は、ほかの作品の紹介でも、どうも wiki を参考にして書いているのではないか、と思ったことが何度かありました。wiki がもともとまちがっているのか、Lion と Elephant は 1 作品ということなのか、いろいろ調べましたがわかりませんでした。

問題点の 2 点目は、「The Peacock” At Home”」と「The Lion’ s Masquerade」の著者は本文でも紹介されている Catherine Ann Dorset ですが（「The Peacock～」は原書が手元にあり、これはまちががなく Dorset が著者です。「The Lion～」のほうもネットで確認したところ著者は Dorset です）、「The Elephant’ s Ball and Grand Fête Champetre」の著者は Amazon など複数で確認しましたが、William Mulready（1786-1863、painter）、W.B.、Charles Welsh（W. B.と Welsh はいつのどんな人物か調べきれませんでした）となっています。

https://www.amazon.co.jp/Elephants-ball-grand-f%C3%AAte-champ%C3%AAtre/dp/B00BAH96FM/ref=sr_1_1?__mk_ja_JP=%E3%82%AB%E3%82%BF%E3%82%AB%E3%83%8A&dchild=1&keywords=The+elephant%27s+ball+and+grand+fete+champetre&qid=1589678456&s=english-books&sr=1-1

<https://archive.org/details/elephantsballgra00wbmuiala/page/n5/mode/2up>

ただし以下のサイトでは、著者の欄に、上記で挙げた名前のほかに Catherine Ann Turner Dorset の名前もあります。

<https://www.worldcat.org/title/elephants-ball-and-grand-fete-champetre-intended-as-a-companion-to-those-much-admired-pieces-the-butterflys-ball-and-the-peacock-at-home-illustrated-with-elegant-engravings/oclc/881551552>

上記の wiki の記事には Two anonymous sequels were とあり、最初は"A Lady"と匿名で発表されたようなので、W.B.なども、もしかしたら Dorset のペンネームなどかもしれないのですが……。wiki をどこまで信用していいかという問題もあります。

問題 1 点目は、続編が「ふたつ」なのか「3 つ」なのかわからないので、「ふたつ」を削除するというのはどうでしょうか（金原先生に確認したところ、「Two-follow-ups はまちがいでしょう」とコメントいただき「とりあえずトル」の指示がありましたので取りました）。問題 2 点目は、3 作品とも Dorset の作品かということがはっきりと確認できませんでした】

●#68 『おばけやしき』

* これはただの飛び出す絵本ではない。この本は、その域をはるかに超えている——歯車を回し、つまみを引っ張り、覆いを外し【申し送り：原文では“lattices to uncover”なのですが、lattices の直訳である「格子、格子窓」に当たる仕掛けが見つかりませんでした。本文のなかでも説明がある、シマウマの仕掛けを利用してお化けがカーテンの裏から出てくる透かし切りの仕掛けが一番近いかなと思い、ここでは「覆い」という訳にしています。】、ドアというドアを開くことができる。『おばけやしき』は、図書館員が「動く絵本」と呼ぶ大傑作なのだ。

* 『おばけやしき』は、ジャン・ピエンコフスキーの代表作で、ペーパーエンジニア（紙を使った立体デザインなどの設計士）のトーア・ラクヴィグ【申し送り：邦訳本にカタカナ表記がなく、別の邦訳作品も発見できなかったため、発音サイトを参考にカタカナ表記にしています。】が制作に参加している。

* この本は、こんな文章から始まる。「どうぞお入りください、お医者さん。古めかしくてすてきな家でしょう。ちょっとばかり冷えますが」この屋敷の住人は、さまざまな病気の症状に悩まされ、診察してもらうために医者を呼んだ。【申し送り：邦訳では、「医者」ではなく、招かれたただの「ゲスト」として訳されていました（『おばけやしき 新装版（大型しかけえほん）』でんでんむし訳、大日本絵画、2005年）】

* よく使われる視覚的トリックで、つまみを引っ張ると馬の絵がシマウマに変わるという仕掛けがあるが、ピエンコフスキーはそれを応用して幽霊が寝室のカーテンの後ろから姿を現す仕掛けを作った。【申し送り：絵本で実際に確認済みです。

<https://www.youtube.com/watch?v=J6efLttQ0T4&t=7s>（1分40秒あたりから）】

●#69 『いまは だめ』

* ミスター・ベンとパッチワークのカラフルなぞうのエルマーは、テレビアニメシリーズ化された。バーナードはというと、いつものように、無視されてしまった。【申し送り：基本的に動物の名前はカタカナで表記していますが、エルマーの絵本は平仮名で「ぞう」となっているので、この章は平仮名の「ぞう」で統一しています】

* デイヴィッド・マッキー David McKee (1935 -)

【申し送り：デイヴィッドとしましたが、はらしょう訳では「デビッド」となっていました（ただし、国立国会図書館のHPにはデイビッドで登録されていました）。ちなみに同作家の〈ミスター・ベン〉シリーズでは「デイビッド」となっていました】

* ひとりきりで外へ様子をみにいき、モンスターに食べられてしまうバーナード。それでも、ママとパパは家にいるのがバーナードではなくモンスターだと気がつかず、いつものように寝る前のしたくをさせる。【申し送り：絵本を確認したところ、モンスターはバーナードを食べたあと家の中にはいつてきます。原文にその記載はないですが、ないとよく分からないと思ったので付け足して訳しています】

* 1964年には、初の絵本『TWO CAN TOUCAN オオハシとよばれるようになったわけ』を発表している（描き直され、1985年に再出版された）。【申し送り：この絵本のタイトル訳は内容をくんで訳しました。内容は、名前のない黒いトリが町にでて、ペンキの入った缶をふたつ運んでいたら、two can（トゥーカン）とあだ名をつけられ、やがて toucan（オオハシ）と呼ばれるようになったという話でした。参考

<https://www.youtube.com/watch?v=eH1iVEqarh4>】

●#70 『コロちゃんはどこ？』

* だから子どもたちは、やんちゃな子犬のコロちゃんを見つけるまで、大きな時計のとびらを自分であけてみたり、ピンクのピアノのふたを持ち上げてみたり、ベッドのすそがざりの下をのぞいてみたりできる。もちろん、そのどこにもコロちゃんはいない。別の生き物が1、2匹ひそんでいる。たとえばピアノのなかには、背中に鳥をのせたカバが隠れているように。【申し送り：原書動画で確認しました】

●#73 〈スイート・ヴァレー・ハイ〉シリーズ

* フランシーン・パスカル Francine Pascal (1938 -)

【申し送り：Francine は wiki では「フランシーヌ」の読み方もありましたが、井辻朱美訳の表記に合わせました】

* 物語は一卵性のふたごを中心に展開する。妹のジェシカは活発で外交的、姉のエリザベスは聡明で思いやりがある。【申し送り：井辻朱美訳『恋はおまかせ』より、どちらが姉で妹かを確認しました】

* フランシーンの前マイケル・スチュワート【申し送り：マイケルは 1924 年生まれで、フランシーンは 1938 年生まれなので兄としております】は劇作家で、『Hello Dolly! ハロー・ドーリー!』や『Mack and Mabel マック&メイベル』といったヒット作を書いている。ジョン、フランシーン、マイケルの 3 人が共作した『George M! ジョージ M!』は、1968 年から 1970 年までの 2 年間、ブロードウェイで上演された。

●#74 『ゆかいな ゆうびん屋さん おとぎかいどう 自転車にのって』と〈ゆかいな ゆうびん屋さん〉シリーズ

* 『ゆかいな ゆうびん屋さん おとぎかいどう 自転車にのって』で、郵便屋さんは 5 つの有名なおとぎ話の主人公に 6 つの郵便物を配達する。【申し送り：原文は letters to seven well-known characters from classic fairy tales となっているのですが、原書と訳書の両方で確認したところ、手紙を受け取るのは『3 匹のくま』のクマ、魔女、大男、シンデレラ、オオカミ、『3 匹のクマ』のゴールドロックです。クマを親子 3 匹ととらえるなら主人公は 8 人、子グマだけととらえるなら 6 人となり seven ではありません。クマやオオカミを「人」で数えるのも少し抵抗があるので、このように訳しました】受取人の中には、まめの木農園【申し送り：原文は Beanstalk Gardens。佐野洋子さんの訳語をそのまま使わせていただきました】に住む大男、ヘンゼルとグレーテルをつかまえた魔女、赤ず

きんちゃんのおばあさんの家に勝手に住んでいる悪いオオカミなどがいる。

* たとえば、悪いオオカミが赤ずきんちゃんの弁護士から受け取った、タイプライターで打った立ち退き請求書、ひとり暮らしの魔女が楽しみにしている小悪魔商会【**申し送り：原文は mail-order shopping catalogue。佐野洋子さんの訳語をそのまま使わせていただきました**】のカタログ、シンデレラに届いた王子との結婚祝いの絵本などだ。

* 金髪の女の子ゴールディロック【**申し送り：原文は Goldilocks。ユーチューブでみた英語版で朗読していた人は「ゴールドロックス」と発音していたのですが、この本に興味を持った人は佐野洋子さんの訳本を読むと思いましたので、佐野訳に合わせました**】から、くまの家でしたいはずらを謝った手紙を受け取った赤ちゃんぐまは、ゴールディロックを許したほうがいいだろうか？

* 『ゆかいな ゆうびんやさん おとぎかいどう 自転車にのって』はジャネット&アラン・アルバーグが手がけた本の中で最も成功した作品だ。ふたりはほかにも多くの絵本を共作している。『ドロボービルのものがたり』（1977年）のほかに、『もものき なしのき プラムのき』（1978年）では、マザーグースや童話の登場人物が出てきて、前のページでみつかった人物が、次のページで別の人物をみつけるというしかけになっている。【**申し送り：原文は I-spy journey through a nursery rhyme wood。訳書を読み、補足して訳しました**】戦時のイギリスを舞台にした『なに みてる?』（1981年）は赤ちゃんのためのすばらしい絵本で、ページに開いた小さな穴から次のページを少しだけみることができる。

【**申し送り：原題は Peepo!で、『なに みてる?』（佐野洋子訳、文化出版局、1998年）のほかに、『だ・あ・れ!?』（こやま峰子訳、アリス館、1990年）もあるのですが、『ゆかいな ゆうびんやさん』は佐野洋子さん訳ですし、こちらのほうが新しいのでこちらにしました**】

●#76 『うんちしたのはだれよ!』

* うんちを題材にしたユーモラスな作品の中でも、これほど子ども（や大人）から笑いを引き出す絵本はないだろう。もともとのドイツ語のタイトルは、いかにもドイツらしく単

刀直入で『【頭の上にしたのはだれなのか知りたかった小さなモグラについて／Vom Kleinen Maulwurf, der wissen wollte, wer ihm auf den Kopf gemacht hat】』だ。

【申し送り：p164の原文は「The Little Mole Who Wanted to Know Who Did a Doo - Doo on His Head（日本語訳：頭にうんちを落としたのがだれなのか知りたかったモグラ）」とドイツ語ではなく、著者が英語に翻訳したものが載せてあるのですが、手元に偕成社の『うんちしたのはだれよ!』があり、そこにドイツ語のタイトルも併記してありますので、それをそのままルビとして打ちました。ですが、自分なりにドイツ語の辞書で調べてみたところ、著者が英語に翻訳したものと少しちがうようでしたので、念のため、ドイツ語の翻訳をしている友人に確認したところ、上のドイツ語を直訳すると「頭の上にしたのはだれなのか知りたかった小さなモグラについて」になり、英語の Doo-Doo（うんち）にあたる言葉はないとのことで、ドイツ語のタイトルと、それを著者が英語に翻訳したのものには少しずれがあります。また、英語のタイトルはこのページの始めにもあるように、ドイツ語のタイトルとはだいぶちがうのですが、日本語の『うんちしたのはだれよ!』というタイトルは、英語よりはドイツ語のタイトルに近いので、この辺の処理が難しく、この処理でいいのか迷っています。ですが、著者がドイツ語から英語に翻訳したものは、ドイツ語のタイトルと少しずれていますので、この処理が妥当かと思っています】

* イラストレーターを探していたホルツヴァルトがエールブルッフを選ぶと、エールブルッフは自分の出生地ヴッパータール【申し送り：原文は Wuppertal。表記はドイツの翻訳をしている友人に確認しました。辞書と wiki でも「ヴッパータール」です】にある、アグリーの出版社をホルツヴァルトに紹介した。『うんちしたのはだれよ!』は出版後たちまち世界的大ヒットとなり、この成功はふたりのキャリアアップにも大いに貢献した。

* 1990年、ホルツヴァルトは広告代理店を設立し、ドイツ中東部のヴァイマル【申し送り：原文は Weimar。ドイツ語の翻訳をしている友人に確認したところ「ヴァイマル」または「ヴァイマール」で、辞書や wiki でも「ヴァイマル」となっています。「ワイマール憲法」など「ワイマール」という表記もありますが、これは Wien がドイツ語読みだと「ヴィーン」だが、一般には「ウィーン」と表記するのと同じ感じだと思うとのことでした】にある名門バウハウス大学で、ヴィジュアルコミュニケーションの教授として、一時期教壇にも立った。だが、絵本作家としての活動も続け、2012年についてに専業作家とな

る。

* もともと読み書きの能力を向上させる目的でボリビアのラパス【[申し送り：外務省のホームページの表記に従っています](#)】で出版されたこの作品は、ある子どもの実体験に基づいている。

* 死を真正面からとらえた『死神さんとアヒルさん』（2008年）は、やさしく美しい語りで、死神と友だちになるアヒルの物語をつづっている。【[申し送り：『レオナルド』も『死神さん〜』も訳書を読んで内容を確認し、少しだけ補って訳しました](#)】

* ヴォルフ・エールブルッフの作品：『死神さんとアヒルさん』（文と絵、2008年）、『The Bear Who Wasn't There 自分探しのクマ』（オーレン・ラヴィ文、2014年）、『I'll Root for You きみを応援するよ』（エドワルド・ファン・デ・フェンデル文、2019年）。【[申し送り：エドワルド・ファン・デ・フェンデルの原文は Edward van de Vendel。調べたところオランダの人でしたので、在東京オランダ王国大使館にメールで問い合わせたところ、このような表記が適切とのご回答をいただきました。また、ホルツヴァルトとエールブルッフのどちらの作品紹介にも、原文には available in English とあるのですが、この部分は不要と思い訳しませんでした](#)】

●#77 『トラッカーズ』

* ストアノームたちは、自分たちが生まれ育ったデパートの「すべてのものはひとつ屋根の下に」【[申し送り：邦訳では「ひとつ屋根の下にすべてのものを」（『トラッカーズ』鴻巣友季子訳、講談社、1992年）](#)】という経営モットーをすっかり真に受け、外から来たノームたちが暮らしていた世界の存在を信じようとしなない。

* この物語は、プラチェットらしいユーモアと言葉遊びを交えながら展開していく。ストアノームたちの苗字も、「De Haberdasheri ド・ハバダッシェリー（紳士用小物）」、「Stationari ステーションナリ（文房具）」、「Del Icatessen デル・イカテッセン（デリカテッセン、つまりお惣菜）」など、デパートの売り場になぞらえたしゃれになっている。

【申し送り：ストアノームたちのなかにも、〇〇家のような派閥があって、それぞれサーネームがあります。邦訳では、De Haberdasheri を紳士服小物にちなんで「ド・カフス」と訳されていました。】

* プラチェットは、この作品で初めて平面の世界を描こうと試みた。のちにその世界はより完成された形で、〈ディスクワールド〉シリーズの舞台となる。【申し送り：“The Carpet People” では、カーペットに似た平面の世界を描き、〈ディスクワールド〉シリーズでは巨大なカメの背中にのった4頭の像に支えられた円盤型の平面世界を描いています。】

* テリー・プラチェットの児童書：『The Carpet People カーペット・ピープル』（1971年）、〈ジョニー・マックスウェル〉3部作-- 『Only You Can Save Mankind 人類を救えるのはきみだけだ』（1992年）、『ゴースト・パラダイス』（1993年）、『Johnny and the Bomb ジョニーと落とされた爆弾』（1996年） -- 『天才ネコモリスとその仲間たち』（2001年）、『Nation ネーション』（2008年）、『Dodger ドジャー』（2012年）。

【申し送り：〈ジョニー・マックスウェル〉シリーズは2巻目のみ邦訳あり（『ゴースト・パラダイス』鴻巣友季子訳、講談社、1994年）】

●#78 『きょうは みんなで クマがりだ』

* 読者はイギリスの海岸の洞穴にクマがいるなんて思いもしないだろうが、子どもたちはたしかにクマを発見する。そのあとに続く4ページには、子どもたちがあわてて引き返し、家に帰って、ベッドにもぐりこむ場面が描かれている。【申し送り：絵本をみると「見開き」2ページだったので4ページとしました】

* BBC の子ども向けの番組制作に携わるようになるが、まもなく左翼的な考え方や共産党との関係（ローゼンの両親は共産党員だった）が、BBC の雇用方針にふれてしまった。

【申し送り：①参考情報として、BBC に勤務しラジオドラマやドキュメンタリー、児童教育番組の制作に携わっていたようです。（参考：https://honto.jp/netstore/pdf/book_29194362.html）②ローゼン本人の twitter に、「My parents were Communists.

When we were kids we went camping. Every holiday.」とありましたので、「共産黨員」としました (<https://twitter.com/michaelrosenyes/status/1050281176135598080>)】

●#80 〈グースバンプス〉 シリーズ

* 〈グースバンプス〉は、1992年の『死の館へようこそ』から始まり、1997年の『MonsterBlood IV モンスターブラッド 4』で終わる。【申し送り：グースバンプスの一部の作品は、津森優子訳と豊岡まみ訳で出版されています。モンスターブラッドはエピソードIだけ豊岡まみ訳で出版されているようですが、IVの邦訳はないようなので、英語のタイトルも記載しました】

●#81 〈ホリブル・ヒストリーズ〉 シリーズ

* デイアリーは権力に批判的で、へそ曲がりなところがある。イギリス首相からの公邸への招待にも応じず、「議会に足を踏み入れた政治家のなかで、ただひとり立派な意思を持っていたのはガイ・フォークス（訳注：国王ジェームズ1世を暗殺するために英国議회를爆破しようとして未遂に終わった、1604年の歴史的イベント「火薬陰謀事件」の実行者）だけだ」と述べた。

【申し送り：引用部分の The Guardian のインタビュー記事の URL は以下の通りです。
<https://www.theguardian.com/lifeandstyle/2012/jul/14/terry-deary-horrible-histories>

「この計画の首謀者はガイ・フォークスではなかったとのことですが、イギリスではこの事件の起こった11月5日を「ガイ・フォークス・ナイト」として、毎年花火を上げる習慣が定着しているそうです。この事件によってイギリスではガイ・フォークスが「英国の反逆精神」のシンボルとなっているようですが、〈ホリブル・ヒストリーズ〉シリーズの作者テリー・デイアリーも権力に対してかなりの嫌悪感を抱いているようです。上記のインタビュー記事では、次のようなやりとりもしています。“I don't want to write history,” he says, firmly. “I'm not a historian, and I wouldn't want to be. I want to change the world. Attack the elite. Overturn the hierarchy. Look at my stories and you'll notice that the villains are always, always, those in power. The heroes are the little people. I hate the establishment. Always have, always will.”デイアリーは、フォークスに思い入れ

があるようで、1996年には“The Truth About Guy Fawkes?: A Stuart Mystery”という本も出版しているようです。】

* ディアリーは若い頃、「Theatr Powys シアター・ポーズ」【申し送り：原文にもありますが、つづりは Theatr のままでよいようです。 <http://theatrpowys.co.uk/>】

●#82 『キッパーのくまちゃんさがし』と〈キッパー〉シリーズ

* 『キッパーのくまちゃんさがし』

Where, Oh Where, is Kipper' s Bear? (1994)

【申し送り：原文 p176 では Where, Oh Where is Kipper' s Bear?となっていて、where と is の間に「,」がないのですが、手元の訳書に併記してある英語の題名や Amazon などを確認したところ where と is の間に「,」が入っていますので修正しました】

* 数の数え方を学ぶ『キッパーのおもちゃばこ』（1992年）や『キッパーと1・2・3』（1999年）、アルファベットについて学ぶ『Kipper' s A - Z キッパーのAからZ』（この絵本では、ぼくの出番はまだ?と何度もたずねる【シマウマ/zebra】が登場する、2000年）、【申し送り：原文は with a very persistent zebra。ユーチューブで絵本の内容を確認し、このように補足しました】天気や色や反対語について学ぶ『キッパーとはれ・あめ・ゆき』、『キッパーとあか・あお・きいろ』、『キッパーとおおきい・ちいさい』（ともに1995年）。

アンソニー・ブラウンやジャン・ピエンコフスキー同様、【申し送り：原文は Jan Pienkowski。『メグとモグ』を担当される方と表記を合わせてあります】グリーティングカードのデザインから始め、やがて同窓だったニック・バターワース【申し送り：原文は Butterworth。Nick Butterworth の邦訳はたくさん出ているのですが、「バトワース」と「バターワース」という表記があり、本文でこのあと紹介されるインクペンとの共作の絵本では「バターワース」という表記が多いのと、リーダーズプラスに「バターワース」という表記が出ていましたので、こちらにしました。PDF原稿で検索しましたが、Butterworth が出てくるのはここだけだと思います】と組んで、銀行からブラジャーまで

さまざまな広告のデザインを手がけた。

* そして、今やふたりは、単独でも共同でも成功した絵本作家になった。ふたりの共作の絵本にはネコのジャスパーが登場する『ジャスパーのかいもの』(1989年)、『ジャスパーとまめのき』(1990年)、幼稚園や学校での特別な日【**申し送り：原文は about special days at school. school とあるのですが、邦訳の絵本(いしざわ ひろこ訳、ペンタン)を読んで確認したら、『たのしい うんどうかい』のほうは「ようちえんの こどもたち」となっていて、どうやら運動会をしているのは幼稚園生のようなのですが、『きょうは えんそく』は行先が博物館で、博物館のショップで最後にお土産を買ったりして、絵の子どもも小学生ばいので、このように訳しました】を描いた『たのしい うんどうかい』(1988年)、『きょうは えんそく』(1990年)がある。ニック・バターワース単独の作品の中でいちばん有名なのは、公園管理人のパーシーを描いたシリーズで、1作目は『ゆきのふるよる』(1989年)だ。【**申し送り：原文 p176 では 1990 となっているのですが、『ゆきのふるよる』(はやし まみ訳、金の星者)や下記のサイトでは 1989 年となっていますので修正しました。**<https://www.goodreads.com/work/editions/1832466-one-snowy-night>】**

* 『Threadbear ぼろぼろのクマ』(1990年)でイギリスのチルドレンズ・ブック賞を受賞し、【**申し送り：原文は a major U.K. award. wiki や、やまねこ翻訳クラブのサイトで「Children's Book Award」であること確認しました**】インクペンはまた注目を集めた。

* インクペンは『ペンギン スモールくん』(1992年)でも、【**申し送り：原文 p176 では 1993 となっているのですが、『ペンギン スモールくん』(角野栄子訳、小学館)や下記のサイトでは 1992 年となっていますので修正しました。**

<https://www.goodreads.com/book/show/8147020-penguin-small>】折りこみ式のページを使っている。子どものペンギンが北極から南極へ旅する話で、南極には、乱暴な【**申し送り：原文は penguin-eating polar bears. eating とあるのですが、角野栄子さんの訳は「ほっきょくぐまたちが あんまり らんぼうするので なんきょくに ひっこしるすことに しました」となっていたので、このように訳しました**】ホッキョクグマから逃げてきた仲間が待っている。

* 『Blue Nose Island : Ploo and the Terrible Gnobbler ブルーノーズ島——プルーとおそろしいグノブラー』（2003年）と〈ブルーノーズ島〉シリーズ【申し送り：この絵本を朗読しているユーチューブをみたのですが、ブルーノーズ島にすんでいる動物たちはみんな鼻が青く、主人公のイヌの名前が Ploo です。Gnobbler はブルーノーズ島の火山にすむおそろしい生き物の名前です。表記は朗読している方の発音に従いました】

* 『キッパーのくまちゃんさがし』で、キッパーはぬいぐるみのクマをみつけようとあちこち【申し送り：原文は house となっているのですが、絵本を読むと、探しているのは家の中だけではないので、「あちこち」としました】探しまわる。階段の下にかけてあるコートをめくると、出てくるのはぬいぐるみのクマではなく「階段グマ」だ。【申し送り：原文は Under-the-Stairs Bears。『キッパーのくまちゃんさがし』（角野栄子訳、小学館）で、角野栄子さんは「かいだんぐま」と訳されているので、その訳語をそのまま使わせていただきました】最後のページのふとんをめくると、思いがけないしかけ（絵本の表紙に書いてある「ライトがひかる」の説明書きが読めない子どもたちにとっては）が待っている。ぬいぐるみのクマは懐中電灯で絵本を読んでいて、懐中電灯の絵の下には本物のライトがはめこんであるのだ。【申し送り：原文は to those who can't read the cover。原書の表紙に「A pup-up Book with Light」とあり、邦訳書では「ライトがひかる」となっています】

●#85 『穴 HOLES』

* スタンリー家の呪われた運命は、19世紀に玉ネギ農家で働いていたアフリカ系アメリカ人のサムが白人女教師キャサリンとキスをしたために殺されたことと密接な関係があった。グリーンレイクでサムが殺されてから、日照りが続いて湖は干上がり、ついには荒地になってしまったという。【申し送り：サムとキャサリンの名前は原文に書かれていませんが補足しました】

* そうはいうものの、はじめてシリーズ化された、ウェイサイド・スクールで起きるへんてこな出来事を描いた小説は、大学時代に地元の小学校でやっていたティーチングアシ

スタント【訳注／授業補助員】のボランティア経験がきっかけになっている。そのときの呼び名「校庭係のルイス先生」と同じ名前の登場人物が〈ウェイサイド〉シリーズにちょくちょく登場しているのだ。【申し送り：Louis the Yard Teacher は、野の水生訳では、「校庭係のルイスせんせ」となっていました。作品を確認したところ、校庭係の先生とは「子どもたちが、休み時間や昼休みにあんまりはしゃぎすぎないように、しっかり監督することだ (p246)」と説明してありました。】このシリーズは、1978年から1995年の間に5巻出版されている。その後25年の空白期間をへて、サッカーは2020年の出版に向け、新たなエピソードを盛りこんだウェイサイド・スクールを執筆中だ。【申し送り：2020年3月に『Wayside School Beneath the Cloud of Doom』という本が出版されていて、この本のことをいっているのかなと思ったのですが原文通りに訳しています。

https://www.amazon.co.jp/dp/B07WSC4CLD/ref=dp-kindle-redirect?_encoding=UTF8&btcr=1】

* ルイス・サッカーのほかの作品：『ウェイサイド・スクールはきょうもへんてこ』（1978年）とそのシリーズ、『Johnny's in the Basement 地下室のジョニー』（1981年）、『ぼくって女の子??』（1987年）【申し送り：唐沢則幸訳『トイレまちがえちゃった!』（1998年）もありましたが、2011年出版のはらるい訳を使用しました】

●#86 『肩甲骨は翼のなごり』

* アーモンドは教師になり、時間のあるときに短編を書いて出版していた。初の長編小説【申し送り：「first novel」の訳ですが、ここでは「初の長編小説」としてあります。「初めての児童書」としたほうがいいでしょうか?】

* アーモンドの『肩甲骨は翼のなごり』【申し送り：ここの「first novel」は金原先生からのご指示で省いてありますが、「初めての児童書」と入れたほうがいいでしょうか?】は、自身もその影響力を認めているが、ガブリエル・ガルシア＝マルケスの初期の子ども向け短編小説「巨大な翼を持つひどく年老いた男」（1955）を彷彿とさせる。

●#87 〈世にも不幸なできごと〉シリーズ

* 語り手が現実世界の人々に話しかけてくるメタフィクションの手法は、挿画にもみられる。原書ではスニケットが、イラストレーターのブレット・ヘルキストの挿画についてふれるくだりがある。

【申し送り：巻末に毎回「わが編集者へ (To My Kind Editors)」というコーナーがあって、スニケットが編集者に向けて次巻の指示を出すというくだりがあります。そこで、ほぼ毎回挿絵画家であるヘルキストへのコメントもあるので、ここのことを指していると思われれます。それを踏まえて、言葉を補って訳しています。原書と邦訳では挿絵画家が異なりますが、邦訳でもほぼ毎回「〇〇の資料を入れるので、挿絵画家の役に立つだろう」という表現が出てきます。】

*デビュー作の大人向けコメディ小説『The Basic Eight ベーシック・エイト』（1998年）で、高校生と悪魔の儀式について書くために資料集めをしていたとき、アメリカ人作家のダニエル・ハンドラーは複数の怪しい組織から情報を得ていた。ハンドラーが賢明だったのは、そうした問い合わせをするときに本名を使わなかったことだ。かわりに、「レモニー・スニケット」という偽名を使っていた。【申し送り：インタビューによると、小説の中で使いたい資料を送ってもらうために右翼団体とコンタクトを取っていたが、メーリングリストに載りたくなかったので、自分の名前を聞かれた際に「レモニー・スニケット」という偽名を使ったとのこと。(https://bwog.com/2014/09/the-kids-arent-all-right-a-conversation-with-daniel-handler/) 『ベーシック・エイト』を含む、このシリーズ以前に出版した大人向けの2作品は、本名を使っていたようで、それからしばらくしてこのシリーズを書くことになって久しぶりにこの名前を使うことになったとのこと。】

* ダニエル・ハンドラーは、スニケットの語る物語世界の設定をふくらませ、さらに数冊の作品を書いた。『The Beatrice Letters ベアトリスの手紙』（2006年）は、スニケットとベアトリス・ボードレー、つまりボードレー三きょうだいの母親【申し送り：原文では、the mother of Violet, Klaus and Sunny ですが、一文に人物名がたくさん出てきてややこしいので「ボードレー三きょうだい」とまとめています。】との手紙のやりとりをまとめた小説だ。

●#88 『ゴーゴー・ジョージア』と〈ゴーゴー・ジョージア〉シリーズ

* 『ゴーゴー・ジョージア』と〈ゴーゴー・ジョージア〉シリーズ Angus, Thongs and Full-Frontal Snogging (1999-) and series

【申し送り：2009年刊行の最新邦訳タイトルは『ゴーゴー・ジョージア』です。その前に、『ジョージアの青春日記シリーズ』というタイトルで別の訳者による邦訳書が2001年にでています。詳しい書誌情報は別資料をご参照ください】

* ジョージアの頭のなかは、メイクと男の子のことでいっぱい。なかでも、ジョージアにとっての「麗しの王子さま」【申し送り：本作品の最新訳、『ゴーゴー・ジョージア』の訳を参照しました。以下、引用はこの新訳に準じております】は憧れのロビー。「男子なんて、ウザいからもう、ムリだから。——つきあったこと、まだないけど」【申し送り：原文”I can already feel myself getting fed up with boys,”です。過去2作の既訳は、「男の子なんて、もううんざり。——つきあったこともないけど」と「男の子なんてもう、うんざりって感じ。とはいっても、まだ付き合ったこともないけど」でした】と、あるときジョージアは宣言する。

* ジョージア・ニコルソンが主人公の本：『ジョージアの青春物語』（1999年）、『恋はミステリー』（2001年）、『女はつらいよ』（2002年）、『明日へジャンプ！』（2004年）、『...Then He Ate My Boy Entrancers そしたらあの子、わたしのつけまつげ食べちゃったの』（2005）【申し送り：“boy entrance”について、こちらの資料を参照しました。“Boy Entrancers”で検索すると、9件この語がでてくるくんだりヒットします。イギリスでは安っぽいつけまつげのことを指すようです。

<https://www.2novelonline.com/read/Away-Laughing-on-a-Fast-Camel-Confessions-of-Georgia-Nicolson-5-8945/792835>

<https://www.urbandictionary.com/define.php?term=Boy%20entrancers>

】

●#89 『もりでいちばんつよいのは?』

* 『もりでいちばんつよいのは?』の挿画を描いてもらうのに、ドナルドソンが最初を選んで

だのがシェフラーだった。【申し送り：ネットで見た〈英ガーディアン〉紙のドナルドソンとシェフラーのインタビューの中では、最初ではなく3番手だったと書かれていました。“Like an actor who becomes famous for a lead role because another actor dropped out, Scheffler was third choice for The Gruffalo”】

●#90 『ストームブレイカー』

* 「アレックス・ライダー」シリーズはすでに10冊以上刊行されているが【申し送り：原文は「a dozen novels」で12冊ですが、2020年4月2日に新たに刊行されたようなので、10冊以上とぼかしました。ただし、12冊目は短編集になっているようです】、そのうちの2冊は、ホロヴィッツがもうこれ以上は執筆しないと公言したあとに出版されている。

* 13歳のときに母親から『フランケンシュタイン』と『吸血鬼ドラキュラ』の本（と人間の頭がい骨）を母親から与えられたアンソニー・ホロヴィッツは、自身の子ども向けの作品でコメディとホラーの微妙な境界線を行ったり来たりする。最初の作品『The Sinister Secret of Frederick K. Bower フレデリック・バウアーのぞっとする秘密』（1979年）は【申し送り：1985年に『Enter Frederick K Bower』に改題されているようです。】冒険コメディで、1979年に出版された。

●#92 『夢の彼方への旅』

* エヴァ・イボットソンは、幽霊や魔法使いの出てくるユーモアに富んだ作品を書く児童文学作家として有名だ。だが、生態学者【申し送り：原文は ecologist。辞書に「生態学者」と出ていましたので、このように訳しましたが、『夢の彼方への旅』（三辺律子訳、偕成社）の著者略歴では「科学者の夫」、イボットソンの最後の作品『おいでフレック、ぼくのところに』（三辺律子訳、偕成社）の著者略歴では「昆虫学者の夫」となっています。「生態学者」というのはあまりなじみがない言葉ですし「科学者」ならぜんぶ含まれそうなので「科学者」がいいかもしれないと思いました。ただ、本作品は自然との共生の考え方が軸にあるようなので、生態学者としたほうがしっくりくる気もしますし、本文の最後にも ecologist が出てくるのですが、そこは科学者よりも生態学者のほうがよい気がし

て迷っています】の夫の死後、ユーモラスな作品を書く気になれなかった。代わりに、亡き夫に手向ける贈り物として、アマゾンで舞台にした美しく抒情詩的な作品を書きあげた。

* マイアは病的なまでに消毒された家から出ることを許されず、孤独でさびしさを抱え、味方になってくれるのは家庭教師のミントン先生だけだ。だが、気の合う友との出会いもある。旅劇団の少年俳優のクロヴィスや、【申し送り：原文は *an actor without a troupe*。without とあるのですがマイアがクロヴィスと出会ったのはアマゾンに向かう船中で、そのときクロヴィスはまだ劇団に所属しており、劇団から抜け出すのはマイアと出会ったあとですので、このように訳しました】イギリスの大地主の後継ぎだが、イギリスにいくのを拒むフィンだ。彼らとの交流を通して、マイアのアマゾンでの体験は、クラスメイトたちが恐れていたようなものではなく、マイアが想像していたよりもっと豊かで実りのあるものになっていく。【申し送り：原文は *In their company her experience of the Amazon is transformed, into neither what she expected nor what her classmates feared, but something even richer*。ここは原文のままだと、「マイアが想像していたものでもなく、クラスメイトたちが恐れていたようなものでもなく」が正しいのだと思うのですが、マイアはアマゾンという未開の地に期待を抱いてイギリスを發ちますし、訳書を読んで「マイアが想像していたものをさらによくしたもの」だと思いましたので、このように訳しました】

* エヴァ・イボットソンの子ども向けの作品：『黒魔女コンテスト』（1979年）、『アレックスとゆうれいたち』（1987年）、『ガンブ——魔法の島への扉』（1994年）、『幽霊派遣会社』（1996年）、『クラーケンの島』（1999年）、【申し送り：原文では、イギリスでのタイトルは『*Monster Mission*』、アメリカでのタイトルは『*The Island of the Aunts*』となっているのですが、偕成社から三辺律子さん訳で出ている『クラーケンの島』は、国会図書館のデータなどを調べたところアメリカ版を訳しているようです。邦訳書があるので、邦題だけ載せました】『*The Star of Kazan* カザンの星』（2004年）、『*The Beasts of Clawstone Castle* クローストーン城の幽霊たち』（2005年）。

* 『夢の彼方への旅』は多くの批評家から称賛され、スマーティーズ賞（9 - 11歳の部）を

受賞し、カーネギー賞とウィットブレッド賞とブルー・ピーター・ブック賞の最終候補者リストに残った。【申し送り：ウィットブレッド賞の原文は [Whitbread Award](#)。wikiに「1971年から2005年までは「ウィットブレッド賞」と称していたが、スポンサーがウィットブレッドから子会社のコスタ・コーヒーに代わったことに伴い、2006年からコスタ賞の名称になった」とあります。現在は「コスタ賞」なのですが、『夢の彼方への旅』の2001年刊行当時はまだ「ウィットブレッド賞」という名称でしたので、原文のままにしました】

●#94 〈ヒックとドラゴン〉シリーズ

* ヒックとトゥースレスは、12冊の本と3本の映画で共演している。コーウェルは他にも『Toothless the Dragon's take on How to Train your Viking ドラゴンのトゥースレスによるバイキングの飼い方』（2006年）や『ヒックとドラゴン ドラゴン大図鑑』（2014年）【申し送り：原文はイギリスタイトルと英語タイトルが書かれていますが、邦訳がありますので、特にその旨の記述は必要ないかと思い、省いています。】などの外伝を書いている。

* コーウェルは2015年にはヒックとドラゴンの完結編である『最後の決闘』を書いている。そのあと、魔法使いの少年と戦士の少女を主人公にした魔法使いのファンタジーシリーズ〈マジックウッズ戦記〉を書き始めた。これはすでに3巻まで発売されており【申し送り：4巻が今年9月に発売されるようです。

<https://www.amazon.co.uk/Wizards-Once-Never-Forever-Book/dp/144495640X>】

、「ヒックとドラゴン」と同じくらいよく読まれている。

●#96 『まいごのペンギン』

* オリヴァー・ジェファーズは、児童書、商業用イラスト、芸術作品、これら3つの制作時間をそれぞれ確保するようにしている。また、子ども時代を過ごした北アイルランドのベルファストで、アーティストを集めてコミュニティをつくり、ダブリン、シドニー、ベルリン、ワシントンD.C.といった世界中の首都で展示会を開いている。【申し送り：参考

情報として。「the art collective OAR」というコミュニティをつくって、絵や絵本の展示会を開いているようです。(参考：「From figurative painting and installation to illustration and picture-book making, his work has been exhibited in New York, Dublin, London, Sydney, Washington DC, Belfast and elsewhere. A co-founder of the art collective OAR, their exhibitions include “9 days in Belfast”, “book” and the award winning “Building”.」 <https://www.yardgallery.com/oliver-jeffers>)。調べたところ、NYやロンドンでも展示会を開いているようです】

* ジェファーズならではの絵は、種類の異なる素材や技法を組み合わせたり、クレヨン画を取り入れたりして描かれることが多い。こうした彼の作品は、スターバックス、ラヴァッツァコーヒー、ユナイテッド航空などのクライアントに採用され、その売り上げに貢献している。【申し送り：Lavazza Coffeeの公式訳がみつからなかったため、楽天やアマゾンで使用されている訳を使用しました】

* 2014年には、同じアイルランド人のバンドU2の〈イノセンス + エクスペリエンス〉ワールドツアーの映像制作に携わっている。【申し送り：videoですが、下記の説明により、ミュージックビデオのほかにステージの映像も手がけたようなので映像制作としました「Beginning with some charitable short films raising awareness for Bono’s charities of ONE.org and (RED), through making a few music videos for the band, plus bringing visuals to various other U2 affiliated projects, finally culminating in assisting Es Devlin with the art direction for their ongoing World Tour; Songs of Innocence and Experience. (<https://www.oliverjeffers.com/pageu2>)」】

* 『まいごのペンギン』の男の子が初登場したのは、デビュー作『みつけたよ、ぼくだけのほし』(2004年)で、『The Way Back Home おうちにかえろう』(2007年)でふたたびその姿をみせてくれている。このタイトルからもわかるとおり、月に不時着した男の子と火星人が家へ帰るため、ふたりで力を合わせるという話だ。【申し送り：訳には影響ありませんでしたが、原文の「on the moon to the find」のtheはまちがいかもしいです。】まいごのペンギンはふたたび、『Up and Down うえへ したへ』(2010年)で男の

子といっしょにでてくる。

●#97 『グレッグのダメ日記』と〈グレッグのダメ日記〉シリーズ

* 学校の劇ではダサイ「木」の役を演じることになり、ハロウィーンのトリック・オア・トリートの最中には、消火器を持った高校生たちに追いかける。【申し送り：原文では “soaked by teenagers” となっていますが、原作を確認したところ、実際にグレッグに水をかけるのは父親のようです。そのため、少々情報を補足して訳しています。】テストでカンニングをしたらみつかってしまうし【申し送り：ここで紹介されているエピソードのほとんどが第1巻のものです。テストでカンニングして見つかるというエピソードのみ1巻では確認できず、第8巻『グレッグのダメ日記 わけがわからないよ!』（2013年）のなかで見つけました。】、三輪車に乗っている人にボールをぶつけるゲームを思いついて、親友のロウリーの手を骨折させてしまう。【申し送り：arm とありますが、確認すると骨折したのは「手」のようです。】

* スピンオフ作品もいくつか作られている。製作された4本の映画は、すべて大ヒット。公開されるたびに、映画のメイキング・ブックもジェフ・キニーが描いている。【申し送り：このうちの1冊が下記に記載されている、『The Wimpy Kid Movie Diary』（2010）のようです。】

* 【申し送り（参考）：ポプラ社公式HP <https://www.poplar.co.jp/wimpykid/>】

●#98 『ハンガー・ゲーム』

* 出場者すなわち「贅」{にえ}【申し送り：『ハンガー・ゲーム』河井直子訳、KADOKAWA/メディアファクトリー、2009年では、このように「贅」と訳出されています。そのまま使えるでしょうか？ それとも、「生け贅」などに変えたほうがいいでしょうか？】

* ふたつの続編に加え、2020年に出版される『ハンガー・ゲーム』の前日譚{ぜんじつ

たん} は、このゲームを強いられる原因となった第 13 地区の反乱にかかわる話らしい。

【申し送り：本書は 2020 年 5 月に『The Ballad of Songbirds and Snakes』として出版済みです。前作の悪役、パネムの最高権力者のスノー大統領が主役で、彼が 18 歳のとき、カットニスと同じ第 12 地区代表の少女の教育係に選ばれ、没落していた自らの運命を変えていくという話のようです。邦訳はまだ出ていません。】

●#99 『大好き！ クサイさん』

* 「クサイさんはくさかった。まえからずっとくさかった。くさいという言葉ではとうてい言い表せないくらい、どこで会ってもくさかった」【申し送り：原文、Mr. Stink Stank. He also stunk. And if it is correct English to say he stinked, then he stinked as well.2015 年初版の訳本ではここは「クサイさんはくさかった。ずっと前からくさかった」でした。以下の経緯も、この訳本で確認し、そのままだと読者にわかりにくい箇所は意味を補足して訳しております】

* 幼いクロエは親のよしとする【申し送り：原文、her parents なのですが、厳密にいうと父親はクロエに味方していました】価値観にさからい、この人と友だちになる。物語は、このクサイさんをユーモアたっぷりに描写するところから始まる。

* デーヴィッド・ウォリアムズは子どもの本の世界に突然現われたわけではない。最初はコメディコントに出演したり脚本を書いたりしていたが、やがて俳優やテレビ司会者として本格的に活躍するようになった。イギリスのブリストル大学【申し送り：原文、studied in (at ではなく) でしたが、ブリストル大で演劇専攻という裏が取れたので、この処理にしております】で演劇を学び、デーヴィッド・ウィリアムズという本名で活動を始めたのだが、俳優の労働組合に入ろうとしたときに同姓同名の登録者がすでにいたため、姓を「ウォリアムズ」に変えたといういきさつがある。

* コメディコント番組『リトル・ブリテン』【申し送り：日本でも DVD が発売されています】に出演すると、辛辣で独特のユーモアが幅広い世代に受けた。

* ウォリアムズの作品はどれも 1 作で完結するが、ひとつを除いてどの作品にも必ずでてくる人物がいる。優しく、頭のいい新聞屋のラジ【申し送り：表記は邦訳書で確認しました】さんだ。

●#100 『怪物はささやく』

* 教会の墓地にそびえ立つイチイの大木が、いつの間にかコナーの家の裏庭に立っていて、巨大な怪物に姿を変えた。【申し送り：原文は **a giant shape looming from the branches of a yew tree in the garden**。原文のままに訳すと、イチイの木はコナーの家の裏庭に生えているように思えるのですが、イチイの木はコナーの家のそばの教会の墓地の真ん中にそびえ立っていて、そのイチイの木がコナーの家の裏庭にきて怪物に姿を変えるので、このように補足しなから訳しました】

* 「人間が甘い嘘を信じたがるのは、そういう嘘を必要とする苦い真実を知っているからだ。そして、その嘘も真実も信じてしまうと、苦しむしなくなる」【申し送り：「人の心は、都合のよい嘘を信じようとするものだ。しかし同時に、自分をなぐさめるための嘘が必要になるような、痛ましい真実もちゃんと理解している。そして人の心は、嘘と真実を同時に信じた自分に罰を与えようとするのだ」（池田真紀子訳、あすなろ書房）】

* 『怪物はささやく』は刊行の翌年の 2012 年、快挙を成し遂げる。1956 年にイギリス図書館協会によってケイト・グリーンウェイ賞が設立されて以来初めて、ケイト・グリーンウェイ賞（イラストレーターに贈られる）と、カーネギー賞（同協会から作家に贈られる）をダブル受賞したのだ。【申し送り：原文は **When A Monster calls was published in 2011, it achieved a unique double. For the first time in their 56 year history the book won both the Kate Greenaway Medal for its illustrator and its companion award the Carnegie Medal for its author**。この箇所、原文のままだとわかりにくいので、情報を補って訳しました。『怪物がささやく』がケイト・グリーンウェイ賞を受賞したのは 2012 年で、ケイト・グリーンウェイ賞が設立されたのが 1956 年で、 $2012 - 1956 = 56$ ですので、**in their 56 year history** はケイト・グリーンウェイ賞が設立以来 56 年と解釈し、このように訳しました（カーネギー賞は 1937 年創設です）。**its companion award** というの

は、カーネギー賞とケイト・グリーンナウェイ賞はどちらもイギリス図書館協会から贈られ同日に発表されますので、それを指していると思いましたが】